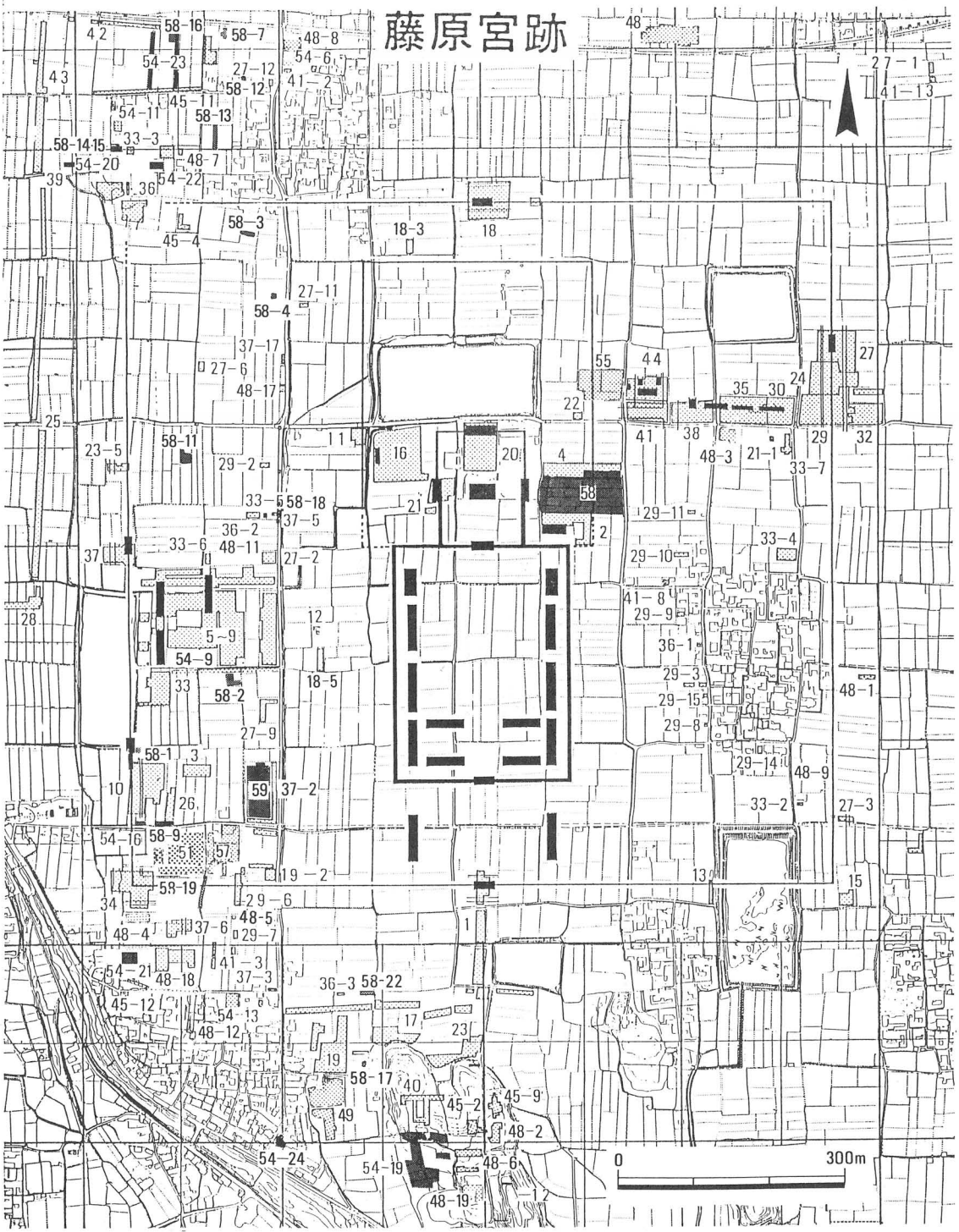
飛鳥・藤原宮発掘調査概報 19

1989年5月

奈良国立文化財研究所



藤原宮周辺調査位置図（数字は次数）

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 19

目　　次

発掘調査地一覧表……2
Ⅰ　藤原宮の調査……4
　1　藤原宮西方官衙地域の調査（第59次等）……4
　2　藤原宮西面南門地域の調査（第58―1次等）……14
　3　藤原宮西北隅地域の調査（第58―11次等）……20
Ⅱ　藤原京の調査……23
　1　左京九条四坊の調査（第54―25次）……24
　2　右京二条一・二・三坊の調査（第58―7次等）……26
　3　右京七・八条一坊の調査（第54―19次等）……33
　4　西京極大路（下ツ道）の調査（第58―5次）……41
　5　その他の調査概要……44
Ⅲ　飛鳥地域の調査……45
　1　石神遺跡第8次調査……46
　2　その他の調査概要……60
写真図版

1988年 発 掘 調 査 地 一 覧 表

※ 本号に未収録

遺跡・調査次数	調査地区	面　積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考
藤原宮 54－19	6AWH－K	1,560㎡	87.12. 3 ～88. 3. 4	橿原市上飛騨町86－1他	橿原市	道路建設・グランド造成
54－20	6AJJ－B	40㎡	88. 1.11 ～88. 1.12	橿原市醍醐町118－12	安本敏夫	店舗新築
54－21	6AJM－D	425㎡	88. 1. 12 ～88. 2.10	橿原市飛騨町94－1	橿原市	宅地造成
54－22	6AJJ－B	170㎡	88. 2. 1 ～88. 2. 9	橿原市醍醐町105－1他	木村正雄	駐車場造成
54－23	6AJQ－E･F	970㎡	88. 2.10 ～88. 4. 1	橿原市醍醐町長谷田 145－9他	森村禎夫他	私道建設
54－24	6AWH－Q	82㎡	88. 3.22 ～88. 3.23	橿原市飛騨町	橿原市	道路建設
54－25	6AMA－Q	240㎡	88. 3.28 ～88. 4.25	橿原市南浦町	橿原市	道路建設
※ 58	6AJF－D･E	5,000㎡	87.12.18 ～調査中	橿原市高殿町鯨町356他	国	計画調査
59	6AJG－T･U	2,673㎡	88. 8. 6 ～88.12. 3	橿原市四分町280－3他	橿原市	団地建替
58－1	6AJL－D･E	170㎡	88. 4.11 ～88. 5.19	橿原市四分町301－1	国	計画調査
58－2	6AJG－R	195㎡	88. 4.25 ～88. 5.17	橿原市四分町290－3	鳥山勇助	住宅新築
58－3	6AJE－S	80㎡	88. 5.23 ～88. 5.25	橿原市醍醐町94－1	池田理	倉庫新築
58－4	6AJE－T	20㎡	88. 5.26 ～88. 5.27	橿原市醍醐町49－1	吉井安光	住宅新築
58－5	6AWJ－P	350㎡	88. 6. 6 ～88. 7. 9	橿原市城殿町1－7他	㈱かとう建設	店舗新築
58－6	6AML－C	32㎡	88. 7.11	橿原市田中町572－1	田代均	住宅新築
58－7	6AJP－T	160㎡	88. 7.12 ～88. 7.28	橿原市醍醐町150－6	杉本竹治	駐車場造成
58－8	6AJQ－K	43㎡	88. 8. 1 88. 8. 3	橿原市醍醐町293－1他	森田忍	住宅新築
58－9	6AJL－F	120㎡	88. 8. 1 ～88. 8.10	橿原市四分町398他	橿原市	道路建設
58－10	6AML－P	60㎡	88. 8.18 ～88. 8.26	橿原市城殿町字 カエト西323－17他	吉見久栄	宅地造成
58－11	6AJK－C	122㎡	88.10.25 ～88.11. 9	橿原市縄手町188－4他	杉本肥三	住宅新築
58－12	6AJP－U	15㎡	88.11. 9	橿原市醍醐町151－1	大西君子	住宅改築
58－13	6AJE－P･Q	192㎡	88.11.28 ～88.12. 9	橿原市醍醐町102	松山末義	住宅新築
58－14	6AJJ－B	54㎡	88.12. 8 88.12.14	橿原市醍醐町106－2他	吉井裕美	住宅新築
58－15	6AJJ－B	16㎡	88.12. 8 ～88.12.14	橿原市醍醐町114	上田修	倉庫新築
※ 58－16	6AJQ－E	132㎡	89. 1. 7 ～89. 1.31	橿原市醍醐町146－10	大西君子	住宅新築
※ 58－17	6AJH－U	32㎡	89. 2. 6 ～89. 2.14	橿原市上飛騨町	橿原市	墓地拡張
※ 58－18	6AJF－ R･S･T	32㎡	89. 1.31 ～89. 2.20	橿原市高殿町・醍醐町	橿原市	下水道敷設
※ 58－19	6AJH－Q	69㎡	89. 2.27 ～89. 3. 3	橿原市四分町	橿原市	下水道敷設
※ 58－20	6AMF－B	900㎡	89. 3. 2 ～89. 4. 6	橿原市南山町	橿原市	道路建設

遺跡・調査次数	調査地区	面　積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考
※ 58－21	6AWJ－Q	25㎡	89. 3.13 ～89. 3.15	橿原市城殿町下八反田３	森田政雄	駐車場造成
※ 58—22	6AJH－S	82㎡	89. 3.24 ～89. 3.27	橿原市上飛騨町63－５	橿原市	下水道敷設
山田道 第１次 ※	6AMC－N･U	1,260㎡	88.12.12 ～89. 4. 6	高市郡明日香村奥山	奈良県	道路拡幅
石神第８次	6AMD－S	1,450㎡	88. 7.25 ～89. 3. 3	高市郡明日香村大字飛鳥字ハリワケ273－１他	奈良県他	計画調査
石神周辺Ａ	6AMD－T	22㎡	88. 3.22 ～88. 3.24	高市郡明日香村飛鳥	明日香村	幼稚園便所改築
飛鳥寺 1987－１次	5BAS－A	36㎡	88. 2. 8 ～88. 2.16	高市郡明日香村飛鳥697	福井襄吉	農小屋新築
飛鳥寺 1987－２次	5BAS－E	6㎡	88. 2.24 ～88. 2.25	高市郡明日香村飛鳥	辻本佳央	農小屋新築
奥山久米寺 1988－１次	5BOQ－G	6㎡	88. 8.17 ～88. 8.18	高市郡明日香村奥山676	的場正輝	住宅改築
川原寺 1988－１次	6BKH－B	35㎡	88.10. 3 ～88.10.12	高市郡明日香村川原43	吉井保	住宅改築
川原寺 1988－２次 ※	6BKH－E	25㎡	89. 1.10 ～89. 1.17	高市郡明日香村川原	大字川原管理組合	道路建設
桧隈寺 1988－１次	6BHQ－C	10㎡	88. 5. 9	高市郡明日香村大字桧前351	河合寿忠他	住宅改築

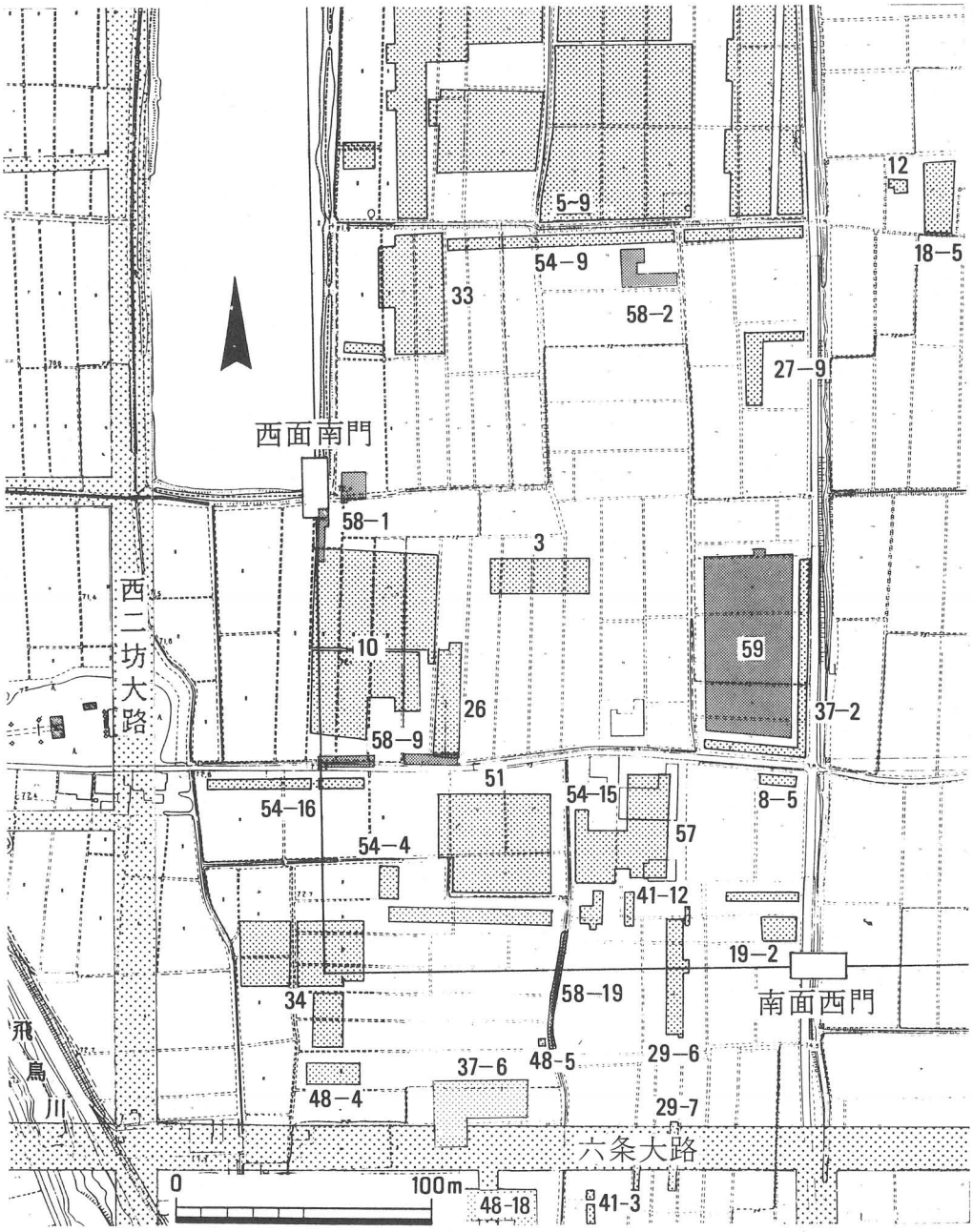
凡　　例

1. 本号には奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1988年４月から同年12月までに行った調査の概要を収録した。また、1987年度の調査で未報告分については本号に収録した。
2. 発掘調査地一覧表には、1988年度の調査地をすべて示すとともに、本号に収録した1986年度の調査地を再録した。なお、寺院跡の調査については、各寺院で年度毎の通し番号を次数としてつけることとする。またその中で主な調査については別の調査次数を合わせて与える。例：和田廃寺第３次（和田廃寺1986—１次)。ただし、本号では石神周辺についての調査次数は未定である。
3. 遺構図に用いた座標は平面直角座標系第Ⅵ座標系で、遺構図では「－」符合を省略している。
4. 本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』を『報告』、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』と省略した。
5. 遺構図には、個々に、遺跡あるいは大地区割ごとの一連番号を付し、その前にＳＡ：築地・塀、ＳＢ：建物、ＳＣ：回廊、ＳＤ：溝・濠、ＳＥ：井戸、ＳＦ：道路、ＳＫ：土坑、ＳＳ：足場穴、ＳＸ：その他、などの分類符号を示した。なお、遺構番号には仮番号で示したものがある。

表紙カット：藤原宮第59次調査出土墨書土器（１部復原）

Ⅰ　藤原宮の調査

1．藤原宮西方官衙地域の調査（第59次等）



第1図　藤原宮西南辺地域調査位置図

藤原宮西方官衙地域では、第５～９次調査（報告Ⅱ）で南北に長い建物群を、第３次調査（報告Ⅲ）・第26次調査（概報９）・第51次調査（概報18）などで小規模な掘立柱建物や塀を、第51・第54―15・第57次調査（概報18）で宮域内先行条坊の六条条間路と西二坊坊間路の側溝などを検出している。第59次調査区はこの地域にあって、調査が比較的希薄な場所にあたっており、かつ調査面積が広いので、藤原宮期の土地利用状況の把握を主目的としたほか、このあたり一帯に弥生時代の有数の集落（四分遺跡）が埋もれているので、下層の遺構の検出も大きな目的にした。また第58―２次調査区は規模は決して大きくはないが、第５～９次調査区に近接した位置にあるので、先の建物に伴う施設の検出が期待された。以下、各調査について述べる。

なお第59次の下層の調査では、天理参考館の金原正明氏に弥生時代の土壌の花粉分析を依頼した。その成果について金原氏に報告していただいた。

a　第59次調査

（1988年８月～12月）

この調査は橿原市の団地建て替えの事前調査として、橿原市四分町で行ったものである。排土の置き場の都合から、まず調査地の南半を、次に北半を調査した。調査区は全体で、東西約36.5m・南北約73mになり、南北に長い長方形を呈する。調査の最終段階で調査区の北端を一部拡張した。なお本調査区の南と東に隣合った位置で1983年に実施した第37―２次調査（概報14）は、宮内先行条坊の西一坊大路の想定位置にあたっていたのでこの検出が期待されたが、側溝も含めて藤原宮に関連する遺構はみつかっていない。

上層と下層とで遺構の性格が異なるので、二つに分けて調査結果を述べることとする。

①　上層遺構

堆積土の層序は、上から、現代盛土、暗灰色粘質土（耕土）、暗青灰色粘質土（床土）、淡褐色土で、この下には、第37―２次調査で明らかになっていた河川による堆積土とみられる明灰褐色砂質土や褐色礫などが堆積していた。遺

構検出はこの明灰褐色砂質土や褐色礫などの上面で行った。

検出した遺構には、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑などがあり、これらは主に、古墳時代、7世紀後半、藤原宮期に属す。

古墳時代の遺構　中央やや北よりに、東西に長い土坑SK6292がある。東西約4.5m・南北約1.4m、深さは約0.3mである。底は一段深く掘り下げられており、この部分の上幅は、東西約4.2m・南北約0.6m、深さ約0.2mである。底に約0.1mほど淡灰褐色砂質土が埋まり、この上に炭化した木材が土坑の長軸方向に横たわっていた。この材は保存状態が極度に悪いので、これが板材であるか、あるいは丸太材であるか判定できなかった。この上を炭を多く含んだ灰色砂質土が覆っていた。上層の埋土からは、完形の小型壺のほか、土師器の破片が比較的多量に出土した。

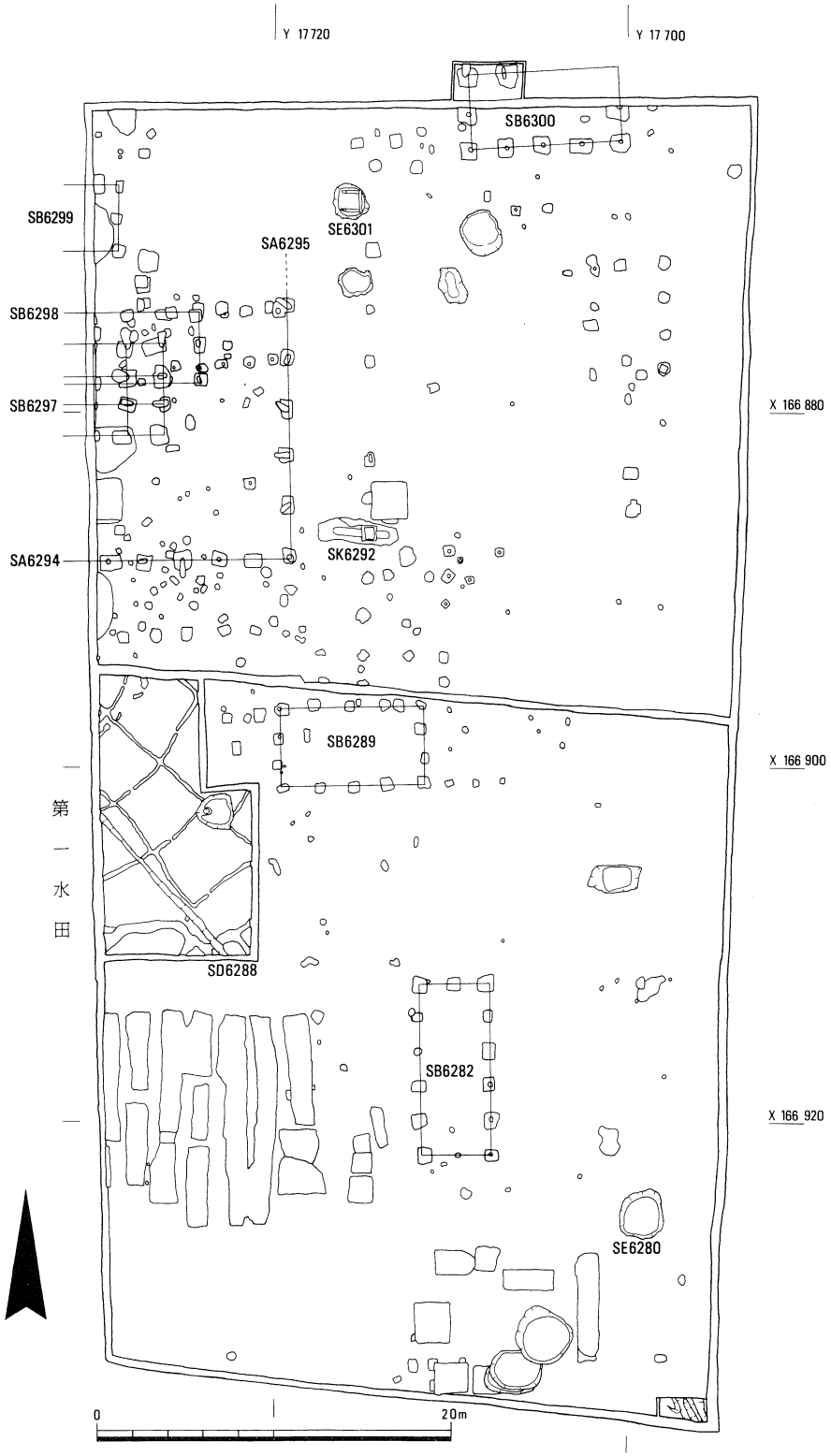
7世紀後半の遺構　掘立柱建物3棟、井戸1基がある。

SB6282は、南半中央にある南北棟の掘立柱建物である。桁行5間（9.7m）・梁行2間（3.8m）。柱間寸法は桁行・梁行ともに約1.9mである。柱掘形は、やや不揃いだが、一辺0.7～0.9mくらいで、方形あるいは長方形を呈す。深さは現状で0.3m前後であった。

SB6289は、中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行4間（8.0m）・梁行3間（4.5m）。柱間寸法は、桁行が2m、梁行が1.5mである。柱掘形は、一辺0.4～0.8mで、方形を呈する。深さは0.3～0.5mである。

SB6298は、北半西端にかかった東西棟の掘立柱建物である。調査区では桁行3間分（6.0m）を検出したにとどまった。梁行は2間（3.8m）で、柱間寸法は1.9mである。柱掘形は、一辺0.7～0.9mで、方形を呈する。深さは0.3～0.4mであった。

SE6280は、東南隅にある井戸である。二段の円形掘形を有し、現状では上段の径は約2.5m、下段の径は約0.8m、深さは約1.9mである。なお底の平面形が長方形であって、かつ0.3×0.75mときわめて狭いこと、さらに井戸枠を据えた形跡が一切認められはいことなどから、このSE6280が実際に井戸として使われたことがあるのかはなはだ疑わしい。



第2図　第59次調査遺構配置図（1：400）

藤原宮期の遺構　掘立柱建物2棟、掘立柱塀2条、井戸1基がある。

SB6297は、北半西端にかかった掘立柱の総柱建物である。調査区内では、南北の側柱を3間（5.1m）、東西の側柱を2間分（4.2m）検出した。建物としてはさらに西に伸びるものと思われる。柱間寸法は南北1.7m、東西2.1mである。柱掘形は、一辺1.0m前後で、方形か長方形を呈する。深さは約0.4m。柱はすべて抜き取られていた。断ち割り調査を行った柱穴ではすべてに礎板がみつかった。この礎板は柱を抜き取る際に、ずれたり、細かく割れたりしていたが、最も大きな礎板は、一辺0.3m四方の方形で厚さ0.06mあった。

SB6300は、北端にかかった東西棟の掘立柱建物である。桁行4間（8.8m）・梁行2間（4.0m）。柱間寸法は桁行2.2m、梁行2.0mである。調査区内の柱穴についてはすべて断ち割った。柱を抜き取っていたのは北西隅柱穴に限られ、他の柱穴ではすべて柱が残っていた。柱の直径は0.15～0.2m、残存長は0.9～1.3mである。なお柱の底面には、墨を十文字にひいた心墨を打っていた。さらに南側柱西第3柱穴（0.22m沈下）、北側柱西第2柱穴（0.32m沈下）、西妻柱穴（0.38m沈下）など、柱に激しい不等沈下がみられた。

SA6294は、北半で東西に伸びる掘立柱塀である。調査区内で5間分（10.4m）を検出した。柱間寸法は、2.08mである。柱掘形は、一辺0.8～1.0mで、方形を呈する。深さは0.15～0.5mであった。東第3柱穴と東第6柱穴で柱が残っていたほかは、全部抜き取られていた。

SA6295は、東西塀SA6294の東端から北に向かって伸びる掘立柱塀である。現状では北5間分（14.3m）で柱穴が途切れている。柱穴の残り具合からみて、以北の柱穴は後代に削平されてしまったのだろう。柱穴の形・大きさ・深さは、塀SA6294のそれと変わらない。なお柱はすべて抜き取られていた。

SE6301は、北端にある平面方形の木組井戸である。井戸枠は、最下段の土居桁3本の他は抜き去られていた。土居桁は長さ1.2m前後で、幅約0.15mの角材である。端部に幅0.15m・深さ0.05mの相欠きを行い、これを仕口として、同様の加工を行った他の角材と組み合わせて固定する。さらにこの仕口部分に、一辺0.05mの枘穴をうがって、ここに井戸の隅柱を立てたものとみられる。

② 下層遺構

下層遺構の調査は上層遺構の状況から、上層の遺構の調査区西端中央に東西6～9m・南北16.5mのトレンチ、さらに調査区の南東隅と南西隅に東西3m・南北1mのトレンチを設けて調査した。

基本的な層序は上から順に、（褐色礫、明灰褐色細砂、褐色砂質土、淡褐色細砂、褐色シルト）→（茶褐色土、暗灰色粘質土、青灰色シルト混暗灰色粘土、炭混暗灰色粘土）→（暗灰色砂質土、青灰色砂質土混暗灰色粘土）、そして青灰色砂質土（地山）で、地山を除けば大きく3層に分けることができた。

このうち中層で水田を3面検出した。上から順に第1水田（茶褐色土）、第2水田（暗灰色粘質土）、第3水田（青灰色シルト混暗灰色粘土・炭混暗灰色粘土）と呼び分ける。この中層からは下になるほど中期後半の土器を多く包含する傾向はあるが、どの層からも弥生時代後期の土器が出土しているので、これらの水田はどれも弥生時代後期に属すとみてよいだろう。

まず第1水田面の調査から述べよう。茶褐色土上面では中央東端に丸くぽっかりあいた現代ゴミ穴を除けば、ここで検出した遺構は水田と溝1条である。

SD6288は幅約0.4m・深さ約0.15mの溝である。調査区を南東から北西に流れる。褐色シルト層から掘り込まれておりこの溝は第1水田とは関係ない。

第1水田は、この調査区の全面に広がっており、一辺4m前後の水田が合計17枚みつかった。地形は緩やかに傾斜し、南東側が高く、北西側が低い。南東端と北西端で水田面の高低差をみると、0.18mであった。畔には、幅で大小2種ある。南端の畔は幅が0.5m前後と太い。高さは現状で約0.03mである。検出状況から、後代に頂部が削平されたかと思われる。他の畔は細く幅は0.3m前後で、高さは0.11mあった。また断面形はカマボコ形にはなっておらず、傾斜面が匙面を呈しているので、整形直後に埋まったことを物語っている。この畔はさきに分けた1まわり太い畔に比べると、配置がきわめて整然としている。つまり等高線に沿うものとこれに直交するものとにはっきり分かれている。このうち等高線に直交する畔は、調査区内をまっすぐ走っているのに対して、等高線に沿う畔は等高線に直交する畔の部分でグイチになっているものが多い。

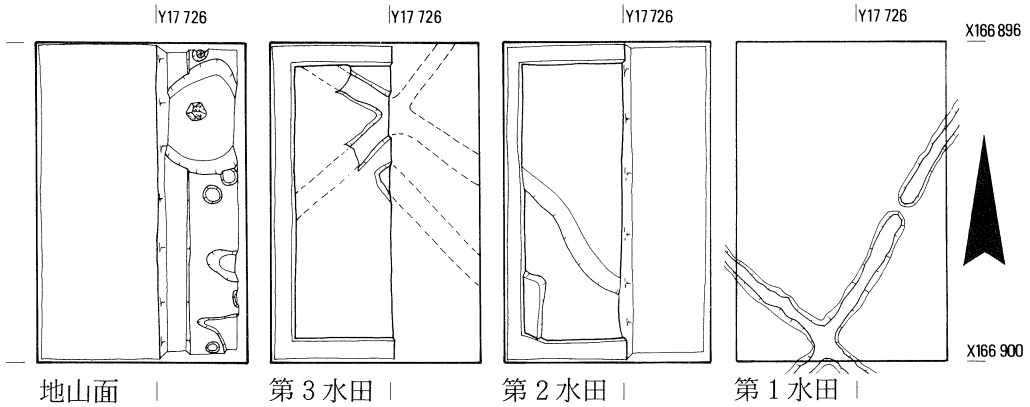
また水田１枚１枚には、上の水田から下の水田までほぼ一直線に水口が切ってあった。その位置には、水田のほぼ中央にあるものと西に片寄ったものの２種類がある。水田面には幅0.2～0.3ｍのわずかなくぼみが、丁度溝状に水の流れる方向に並んでいたのでこの間に稲株の存在をうかがわせたが、水田面で稲株はもとより足跡もみつけることはできなかった。１枚の水田面で0.03～0.04ｍぐらいの凹凸はあるが、水田１枚１枚は基本的に平坦であって、これが0.03～0.05ｍの高低差を有しながら水田が階段状に連なっていた。つまりこれらの畔は毎年つけ換えられたとは到底思えない情況にあった。

第１水田の下の遺構を調査する目的で、北半部で東西2.6ｍ・南北４ｍの範囲を掘り下げた。その結果、水田をさらに２面と、地山に掘り込んだ柱穴を確認することになった。

第２水田は、第１水田の下約0.1ｍにあった。調査範囲が狭いので、水田の形は分からなかったが、畔の幅が1.0ｍ前後と太いこと、畔の方向が第１水田のそれにだいたい合っていることを確かめた。

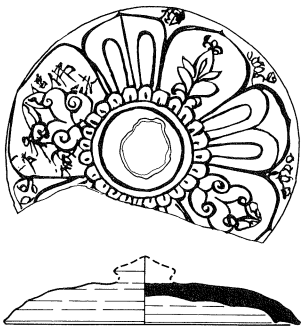
第３水田は、第２水田の下約0.15ｍに営まれていた。平面で確認できた畔と、壁面で確かめた畔の位置を結んでみると、畔の大きさは第１水田の小畔に一致し方向もそれによく合っていることが明らかになった。さらにこの位置は等高線に直交する２本の畔が近接し、一本がなくなるという丁度扇の要のような場所にあたっていたように思われる。

地山面で、柱穴を検出した。このうちの１つには、直径約0.25ｍという太い



第３図　第59次調査下層遺構変遷図

柱が残っていた。掘形は円形に近く、直径約1.3mであった。掘形からは、中期中葉の土器に限って比較的豊富に出土したので、この建物はこの時期かその直後の時期にあたるものと思われる。これ以外に直径0.2m前後の柱穴が数個みつかった。



第4図　墨書土器（1：3）

また調査区の南東隅と南西隅で、一部掘り下げを実施した。どちらでも、第1水田の耕作土、すなわち茶褐色土とみられる土層を確認したが、畔を検出することはできなかった。南東隅では幅1.5m・深さ0.7mの溝を検出した。規模や流れの方向から溝SD6288に連なる可能性が高い。

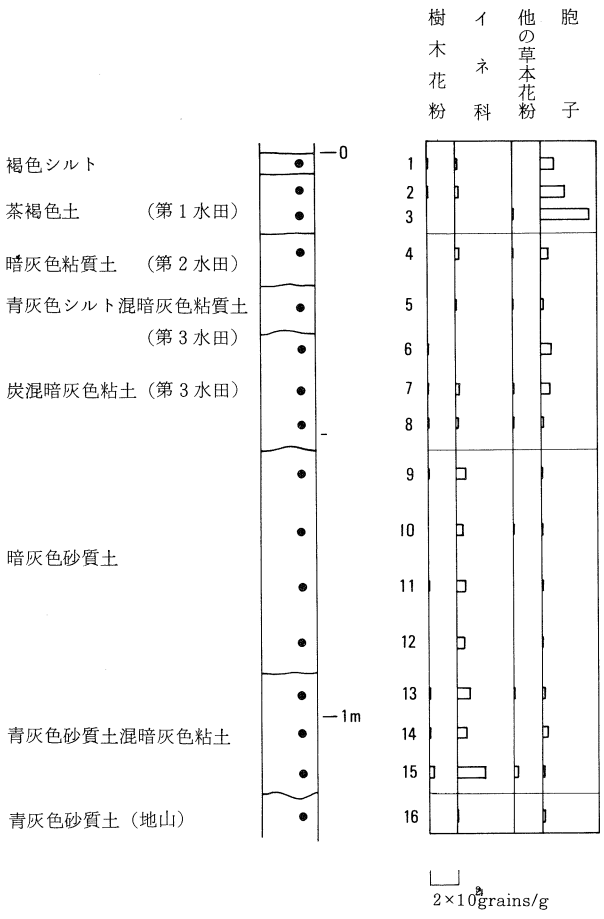
遺物　弥生時代から中世におよぶ遺物が出土した。土器のうちでは第4図に掲げた須恵器の杯蓋が特筆されよう。井戸SE6280からの出土品で飛鳥Ⅳ段階に属す。外面には、つまみ部分を中心として蓮華紋やパルメット紋などをめぐらし、一部に「仏」・「法」・「僧」などと墨書している。この井戸からはこの他に、木簡2点、斎串2点、手斧の柄1点、瓢箪の皮や桃の種も出土した。

四分遺跡（第59次調査）における花粉分析

層序と試料　当遺跡では水田遺構の堆積物を含む土層断面より16試料採取した。試料採取地点の層序は第5図のとおりである。地層は全体としてやや分級がよく、細粒の炭化物に富む。層理面の発達が悪く、葉理も最上位層では認められるものの、他では顕著でない。これらの地層は土壌層と推定される。

方法　試料の処理は、水酸化カリウム処理―砂粒の除去―フッ化水素酸処理―アセトリシス処理の順に行った。残渣をグリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製し、直ちに検鏡した。花粉の同定は、標本との対比で行った。

結果と考察　各試料とも花粉は豊産せず、分析結果は、試料1gあたりの花粉・胞子数として第5図に示した。よって、組成比（相対比率）による植生および環境の復元推定は困難であった。全試料を通じ微細な炭化物が豊産し、花粉・胞子もいたんだものが多い。これは、分解・溶食をうける特殊な堆積環境下で



第５図　花粉分析結果

あったことを示し、土壌生成作用によるものと推定される。同様の堆積物は奈良盆地の低部の河川周辺にしばしば発達している。

産出した花粉・胞子は以下のようである。

樹木花粉　Abies（モミ属）、Pinus subgen. Dipoxylon（マツ属複維管束亜属）、Sciadopitys（コウヤマキ）、Cryptomeria（スギ）、Quercus subgen. Cyclobalanopsis（コナラ属アカガシ亜属）、Quercus subgen. Lepidobalanus（コナラ属コナラ亜属）、Celtis-Aphanathe（エノキ属―ムクノキ属）、Ulmus-Zelkova（ニレ属―ケヤキ属）、Araliaceae（ウコギ科）

草本花粉　Gramineae（イネ科）、Compositae（キク科）、Chenopodiaceae-Amaranthaceae（アカザ科―ヒユ科）

花粉・胞子の産出傾向は第５図に見るように４つに区分され、堆積環境・土壌生成作用・植生等の変化の反映とみられる。また、地層の区分とも一致する。

（天理参考館　金原正明）

まとめ

今回の調査においては、７世紀後半から藤原宮期に属する建物を検出するとともに、弥生時代後期の水田を確認した。この調査区の西にはよく知られた四分遺跡があるが、周辺の環境の変化に対応した集落のあり方の一端を花粉分析の結果ともあわせて、明らかにできた。さらに周辺地域での調査が待たれる。

b　第58－２次調査

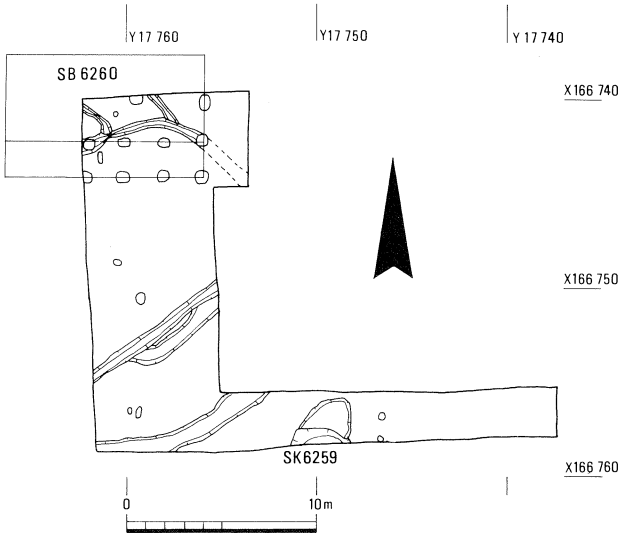
（1988年４月～５月）

この調査は住宅新築に伴う事前調査として行った。調査地は藤原宮西方官衙地域の一画にあたっており、北で第５～９次調査（報告２）と第54－９次調査（概報18)、西で第33次調査（概報12）の各調査区に近接している。調査は東西25m・南北18mのＬ字形の調査区を設けて実施した。層序は、上から耕土、床土、灰褐色粘質土（厚さ0.3m）と続き、地表下0.7mで茶褐色粘質土からなる地山層に至る。遺構はこの地山面で検出した。

検出した遺構には掘立柱建物や土坑の他に、古墳時代の溝などがある。掘立柱建物SB6260は調査区内では東西３間分、南北２間分を検出した。南庇をもつ東西棟と考えられる。柱間寸法は桁行、梁行とも2.1m、庇の出は1.8mである。柱掘形は一辺0.6m程度のやや不整形な方形を呈する。この建物は、柱穴の埋土の状況などから、藤原宮期の直前の時期が考えられる。

土坑SK6259は径3.5m、深さ0.8m以上の円形の土坑である。ここからは藤原宮期の土器が少量ではあるが出土している。

今回の調査では、南に庇をもつ比較的大きな建物SB6260を検出することができた。この建物の性格付けについては、この地域一帯における調査の進展を待って行いたい。



第６図　第58－２次調査遺構配置図（１：400）

2．藤原宮西面南門地域の調査（第58—1次等）

藤原宮の西辺部では西面中門の位置を第37次調査（概報14）で確かめ、外郭施設である大垣・内濠・外濠を北から第36次調査（概報14）・第10次調査（報告Ⅱ・Ⅲ）・第56—16次調査（概報18）・第34次調査（概報12）などで検出した。今回の調査の1つは西面南門にあたっている。

a　第58—1次調査

（1988年4月～5月）

この調査は橿原市縄手町・四分町において、宮の西面南門の位置確認と宮に先行する条坊遺構である五条大路の規模確認を目的として行った。調査地は第10次調査区と一部重複して、その北に接する地点である。調査は南北2箇所の調査区を設定して行った。調査面積は170㎡である。

遺構　遺構は耕土・床土下の弥生時代の遺物包含層上面で検出した。検出した主な遺構は西面大垣・西面内濠・五条大路の南北両側溝である。検出が予想されていた西面南門は削平のため、基壇化粧・基壇土・礎石据え付け痕跡等の門の施設は残存しておらず、また基壇の掘込地業も行われていないが、大垣の門への取り付き部を確認することができた。

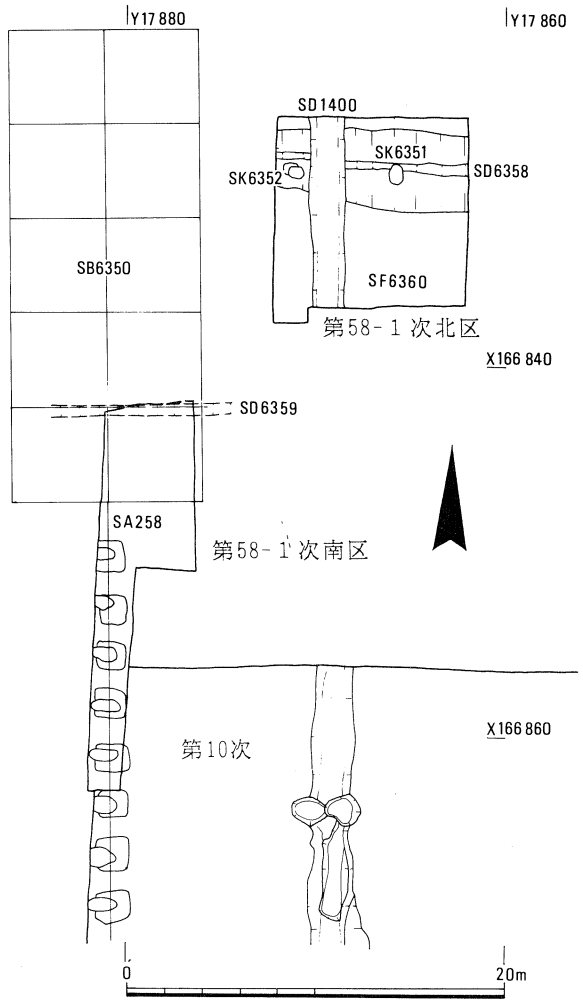
北区で検出した西面内濠SD1400は幅1.6～2.1m・深さ0.7～0.9mである。内濠の堆積は4層に分けることができ、最上層は埋め立てた土で、瓦を大量に含んでいる。最下層には宮造営時の木材の削り屑等が含まれていた。上から3層目から木簡がまとまって出土した。五条大路北側溝SD6358は幅1.5m・深さ0.5mである。側溝の一部はあふれて幅3.5mとなっている。SD6358の最下層は砂が堆積して流水の痕跡をとどめるが、上層は埋め立てられている。内濠SD1400は側溝SD6358の堆積土を切り、両者は並存しない。

南区では西面大垣SA258と五条大路南側溝SD6359を検出した。西面大垣SA258は掘立柱塀で、柱間寸法は約2.65mである。柱掘形は一辺約1.5mで、深さは0.7mと浅く、相当削平を被っているものと考えられる。柱はすべて西

側に抜き取られている。第10次調査区で検出した大垣の北端から北へさらに2間分の柱穴を検出したが、これより北には続かないため、他の藤原宮の宮城門の調査例からみて、この空閑地に西面南門ＳＢ6350が存在したものと考えられる。

五条大路南側溝SD6359は調査区北端の壁面で確認した。幅0.6ｍ・深さ0.1ｍである。堆積は流水の痕を残す砂だけである。五条大路SF6360の幅は現状の側溝心心間で13.5ｍである。

遺物　出土した遺物は木簡、瓦、土器、木器および鉱物性薬物と想定できる鉱物類で、それらの大半は内濠SD1400からのものである。



第7図　第58－1次調査遺構配置図（1：400）

遺物の中で特に注目されるものは木簡である。木簡は削り屑も含めて135点が出土した。木簡の記載内容のほとんどは薬に関連するものであり、その大半は付札である。年紀を記す木簡は出土しなかったが、姓の記載方法、地名の『評』の記載からみて、大宝令以前の浄御原令制下（701年以前）のものと考えられる。主な木簡の記載内容は表示したとおりである。(2)は記載方法及び薬の量目からみて薬品の処方を記したものと考えられるが、その具体的なものは現在のところ不明といわざるをえない。また、「石流黄」（硫黄）・「黒石英」などの鉱物性薬物の記載も注目される。(1)の削り屑に記される「外薬□」は浄御原令制下の外薬寮（大宝令の典薬寮の前身）を示す可能性もあろう。

(1)・外薬□

(2)・□□□□両桃四両桂心三両白芷三両

□　車前子三両防風三両

□両

栢実一両　　右九物

(3)・石川阿曽弥　所賜　忽生地黄

(4)・伊看我評

・当帰十一斤

(5)・无耶志國薬桔梗卅斤

(6)・黒石英十一

(7)・石流黄□

(8)・人参十斤

第1表　内濠から出土した主要な木簡

鉱物性の遺物としては硫黄・白雲母・白石英・磁鉄鉱（慈石）・樹脂状品（琥珀または松脂か）が出土した。これらのものが遺物として出土することはきわめて希であろう。また、硫黄・石英は今回出土した木簡の記載にもあるものである。特に硫黄はガラス状の結晶を呈している。白雲母・白石英は正倉院に現存する薬品にも認められるものである。薬物木簡と伴出したことを重視すれば、これらの鉱物性遺物は薬品としてとらえることが可能であろう。

瓦は軒丸瓦5点・軒平瓦15点・隅切平瓦1点が出土した。土器は須恵器・土師器が出土している。木器・木製品は匙、建築部材が出土している。

まとめ　今回の調査で確認できたことは以下の3点である。

1．先行条坊遺構五条大路SF6360の幅員

2．西面南門SB6350の位置

3．鉱物性薬物（石薬）および薬物木簡の出土

削平を被ってはいるものの五条大路の南北両側溝を確認することができた。北側溝は一部あふれて幅広くなっているが、深さが浅すぎることは否めない。調査区の東北方120ｍの位置で確認した西二坊坊間路の東側溝SD1070（第54―9次調査・概報18）は南流して五条大路北側溝に流れ込むことは確実であるが、レベルをみると東側溝SD1070の方が深くなっており問題を残す。

西面南門SB6350はすべて削平されて痕跡を残さないが、大垣の門への取り付き部が確認できたため、他の確認できた宮城門と比較してその規模を推定することができる。東面北門SB2500（第27次調査・概報10）・北面中門SB1900（第18次調査・概報6）ではそれぞれが先行条坊道路である三条大路SF

2400・朱雀大路SF1920の心を門の心として用いている。条坊遺構は検出できなかったが、西面中門（第37次調査・概報14）においても周辺で確認した条坊遺構よりみれば、四条大路の心と門の心とは一致するのである。以上の3門は大垣の取り付き部の間の空閑地の距離が約30mと一致しており、柱間寸法17尺（5.0m）等間の5間門と復原されている。西面南門では五条大路北側溝の位置が若干南に偏るのは事実であるが、他の宮城門と同一の規模であったと考えられる。なお、基壇の規模は30m×15m程度のものと推定できる。

今回の調査では内濠SD1400から薬物木簡・石薬が集中して出土している。これらの薬物の記載及び石薬は現在のところ日本最古のものであり、『本草学』に寄与するところ大といえよう。またこれらの薬物などの位置付けに関しては1966～69年の奈良県教育委員会による調査において出土した薬物木簡との対比が必要である。

県の調査では内裏東外郭の大溝SD105と北面外濠SD145から薬物木簡が出土し、『典薬』と記す削り屑も出土した。また、薬物木簡以外にも薬を請求する文書木簡が出土している。さらに、宮北方の小字名にテンヤク・天役（てんやく）の2箇所があるため、宮の北方に典薬寮関連施設の存在を推定したのである。県の調査による薬物木簡は地名の『郡』制の表記および、伴出する木簡の年紀からみて大宝令施行時（701年以後）のものとされている。一方、今回調査の木簡は年紀はないものの、地名の『評』制の表記などからみて、浄御原令制下（701年以前）のものと考えられる。

時期は若干ことにするが、このような藤原宮における2箇所での薬物木簡の出土は如何なることを意味するのであろうか。一つの解釈としてはある一つの役所の場所の移動が考えられる。もう一つの解釈としては、異なる二つの役所の存在が考えられる。養老令によれば、薬物・医療にかかわる主たる官司には二つのものがある。それらは一般官人を対象とする宮内省被管の典薬寮と、天皇などを対象にする中務省被管の内薬司である。

平城宮においても、内裏東外郭に東接する大溝SD2700から薬物木簡が出土しており、宮の西方においても南面西門に面する二条大路北側溝SD1250から

も4点の薬物にかかわる木簡が出土している。このことと藤原宮における2箇所からの薬物木簡の出土は軌を一にすることであろう。

陽明文庫本などの平安宮の宮城図では宮城内の西方に典薬寮の所在が認められる。宮城図が成立した時期には内薬司は典薬寮に併合されており、宮城図には表わされていない。しかしながら職掌を考慮すれば、天皇にかかわる医療を担当する内薬司は本来的には内裏近傍に所在する方が合理的なものであろう。

藤原宮における薬物木簡の2箇所からの集中的な出土は、ある一つの官司が移動したと考えるよりも二つの官司が存在したと考えたほうが合理的であろう。このような情況は藤原宮における上記2官司の存在場所を暗示しているものと考えることができよう。すなわち、典薬寮は宮の西方に、内薬司は内裏の東方に存在した可能性がきわめて強いものといえよう。

次に、石薬および石薬を記す木簡についてふれておこう。石薬は医生の教科書である『神農本草経集注』によれば、主として仙薬としての薬効が記されている。また、硫黄・石英は三国・六朝から唐代に流行した「五石散」の材料となるものである。「五石散」とは別名「寒食散」と呼ばれた一種の覚醒剤的な薬品であった。この薬品を服用するにあたっては、数々の禁忌があり、それを破ると強烈な副作用があるという代物なのである。

はたして、これらの石薬がこの時代においてそのような使用がなされたか否かは不明であるが、県の調査で出土した木簡にこれらのことに関連するものがある。それは「漏盧湯」という薬の処方をしるした木簡である。「漏盧湯」は『医心方』引用の5世紀中頃に編纂された『小品方』や、唐代の処方集に丹毒の解毒剤として記載されるものである。

奈良時代では、『種々薬帳』に記載される天平勝宝8（756）歳に正倉院に献納された薬物の中に、「紫雪」などの数種の処方された薬品が存在する。これらの処方された薬品の大半は丹毒の解毒剤とみなされるものである。正倉院のこれらの薬品は、薬物が献納された数年後の天平宝字5（761）年には内裏からの請求によって搬出されているものであり、丹毒の解毒剤として使用されたものと考えられるのである。そして、弘仁2（811）年の曝涼時には「紫雪」

は正倉院には存在していないのである。また天平20（748）年の『法隆寺資財帳』に記載される薬物の中にも「聖僧分捌種」のうちに「紫雪」などの丹毒の解毒剤の存在が記されているのである。このように石薬の解毒剤は奈良時代中ごろにおいては、使用もしくは保管されていたことが明白なのである。

平安時代の金石薬の使用は仁明天皇の例が『続日本後紀』に記されており明白なことである。奈良時代においても前記の例などからみて、金石薬が使用されていた可能性はきわめて高いものといえよう。

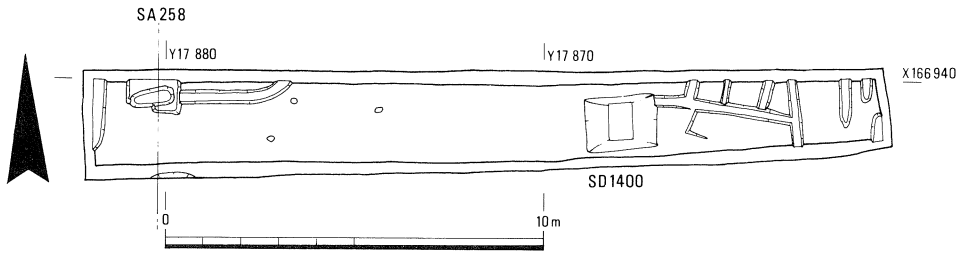
ひるがえって、藤原宮の時代においても石薬を記す木簡・石薬の出土、および一般的でない丹毒の解毒剤の処方を記す木簡の存在からみて、金石薬が使用されていた可能性はきわめて高いものといえよう。

b　第58—9次調査

（1988年8月）

この調査は市道拡幅工事に伴う事前調査として、橿原市四分町において実施したものである。東西20m・南北4mの調査区を2箇所設定した。なお東区は一部が第26次調査地（概報9）と重なっている。

西区で西面大垣SA258、内濠SD1400を検出した。調査区の西端でみつかった大垣SA258の掘形は、方形で一辺1.4mの掘形をもち、柱は西に抜き取られていた。この東で内濠SD1400を検出した。幅1.8m・深さ0.8mで、埋土の上層からは土器・瓦が、下層からは小量の木片が出土した。この他に、西区では小溝や小穴を検出したのみである。東区では藤原宮期の遺構はなかった。



第8図　第58－9次調査遺構配置図（1：200）

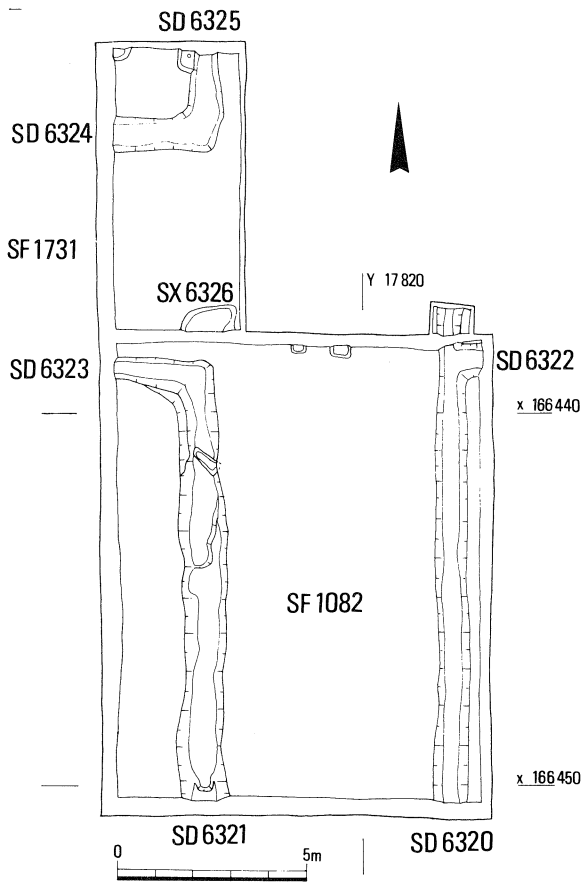
3．　藤原宮西北隅地域の調査（第58—11次等）

藤原宮の西北隅地域では、合計４件の発掘調査を行った。宮内先行条坊の交差点、外濠と大路のあいだに広がる空閑地（外周帯）などの調査がある。

a　第58—11次調査

（1988年10月～11月）

この調査は宅地造成に伴う事前調査として橿原市縄手町で行ったものである。調査地は藤原宮北西部、大極殿の西約450mに位置する。ここは宮内の先行条坊、四条条間路と西二坊坊間路の交差点の存在が予想されていたので、交差点と宮北西部の遺構の配置状況の確認を主な目的として、東西9.3m・南北13mに北を一部拡張した調査区を設けて調査した。層序は上から耕土・床土・淡灰褐色粘質土の順で、遺構は地表下0.4～0.6mの淡灰褐色粘質土上面で検出したが、この層は調査区東南部では灰色粗砂に移り変わっている。



第９図　第58－11次調査遺構配置図（１：200）

検出した主な遺構には、四条条間路と西二坊坊間路の側溝、土坑SX6326がある。

西二坊坊間路SF1082（幅員：5.5m、溝心心距離：約6.6m）については、東側溝SD6320と西側溝SD6321・SD6325を検出した。東側溝SD6320は幅１～0.7m・深さ0.12mで、交差点を突きって北流する。西

側溝SD6321は幅１ｍ・深さ0.32ｍ、同SD6325は幅0.8ｍ～1.1ｍ・深さ0.12ｍで、それぞれ四条条間路の南側溝、北側溝に接続する。四条条間路SF1731（幅員：5.4ｍ、溝心心距離：約6.3ｍ）についても、南側溝ＳＤ6322・SD6323と北側溝SD6324を検出した。南側溝SD6322は幅約0.8ｍ・深さ0.28ｍで、北流する東側溝にそそぎ込む。南側溝SD6323と北側溝SD6324はともに幅0.9ｍ・深さ0.3ｍである。SX6326は摺鉢状の土坑で時期の決め手となる遺物は出土してない。

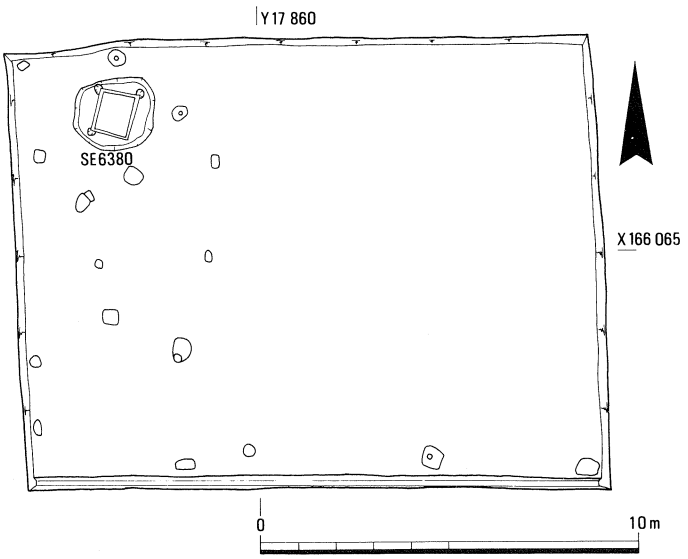
出土した遺物の大半は、道路の側溝より出土した七世紀後半の須恵器・土師器である。特にSD6321から多量に出土した。

今回の調査では四条条間路と西二坊坊間路の交差点を検出した。これは藤原宮北西部の先行条坊を復原する上で貴重な資料である。今後の周辺地域の調査の進展に期待したい。

b　第54－22次調査

（1988年２月）

この調査は、駐車場建設に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原宮西北隅の外濠と二条大路とのあいだの空閑地（外周帯）にあたる。調査では東西14.8ｍ・南北11.5ｍの範囲を対象とした。調査区の層序は上から耕土、床土、暗灰色土、暗褐色土の順であり、古墳時代から中世にいたる遺構は、地表下0.4ｍ前後にある暗褐色土上面で検出した。調査の結果、中世の井



第10図　第54－22次調査遺構配置図（１：200）

戸１基と古墳時代の小土坑数個を検出した。なお藤原宮に関連する遺構は確認できなかった。

調査区の西北隅で、中世の井戸SE6380を検出した。一辺約２ｍ・深さ1.8ｍの隅丸方形の掘形を持ち、横板６段分の井戸枠が残っていた。井戸枠は長さ1.1ｍ・幅0.6ｍの板を横組にし、隅は相欠きの仕口をつくって組み合わせる。井戸の底には直径0.48ｍ・高さ0.2ｍの曲物２段が置かれていた。井戸内部からは黒色土器（10世紀後半）や曲物容器・斎串などの木製品が出土した。

井戸周辺に点在する小土坑群は、灰色の砂質土が入る直径0.5ｍ・深さ0.2～0.3ｍの小穴の集まりで、中からは古墳時代に属す土師器の小型壺や甕が出土した。柱穴とも思われず、性格は不明である。

なお、本調査では、藤原宮関連の遺構は確認できなかった。宮外濠と二条大路間との空閑地として、遺構の少ない地域であるためかも知れない。今後の周辺の調査の進展を見守りたい。

c　第58―３次調査

（1988年５月）

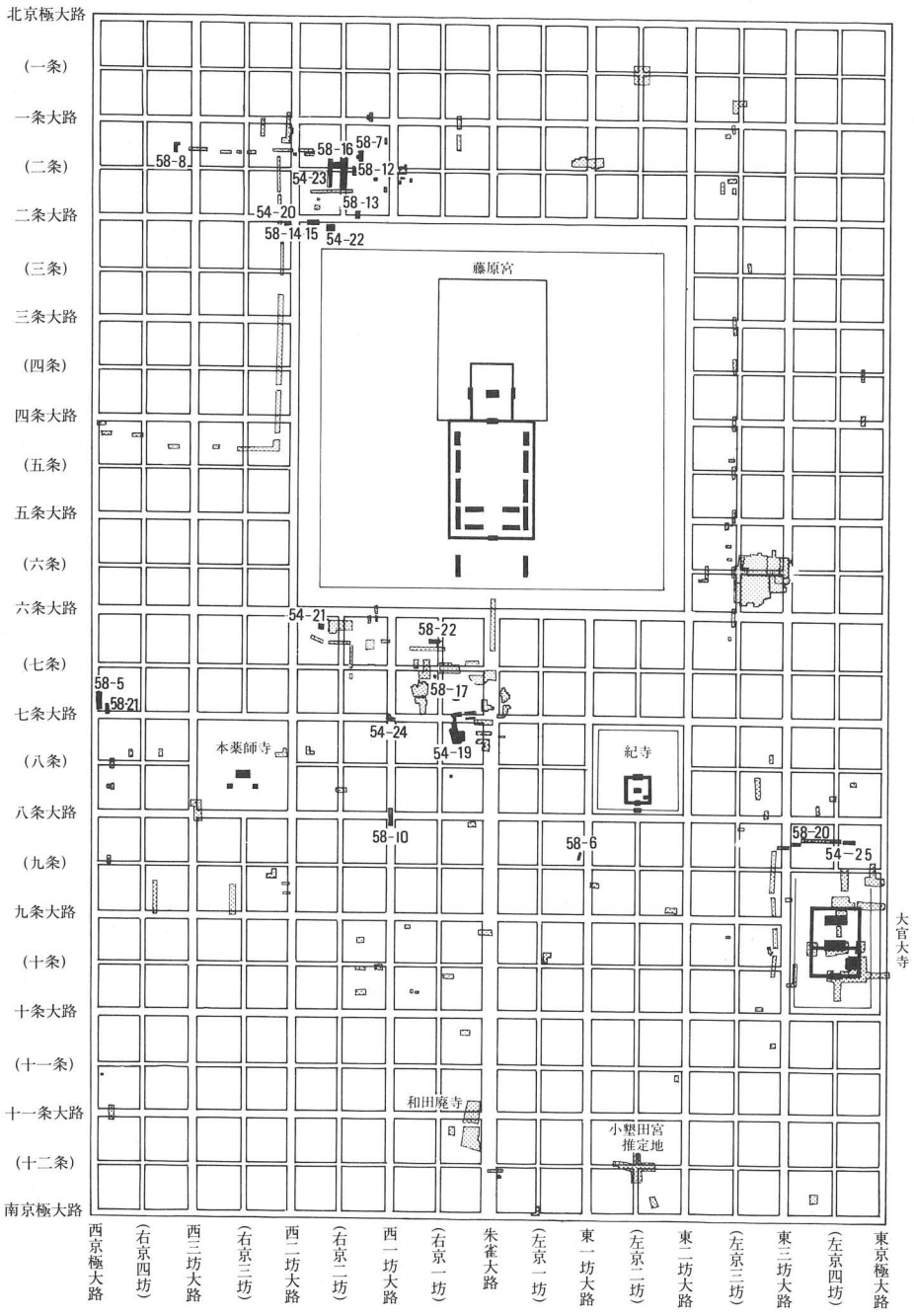
この調査は、倉庫新築に伴う事前調査として橿原市醍醐町において行ったものである。調査地は藤原宮の内濠周辺の遺構検出を目的に、東西14ｍ・南北5.5ｍの調査区を設定した。調査の結果、中世に属す小柱穴17、中世溝２条を検出したが、藤原宮期に属する遺構は検出できなかった。

d　第58―４次調査

（1988年５月）

この調査は、住宅新築に伴う事前調査として橿原市醍醐町で実施したものである。調査は東西４ｍ・南北５ｍの調査区を設定して行った。調査の結果、藤原宮期の遺構は検出できず、中世に属する南北溝２条、東西溝１条を検出したにとどまった。

Ⅱ　藤原京の調査



第11図　藤原京内調査位置図（1：20000，網目は既調査地　条坊は模式図）

1．　左京九条四坊の調査（第54—25次）

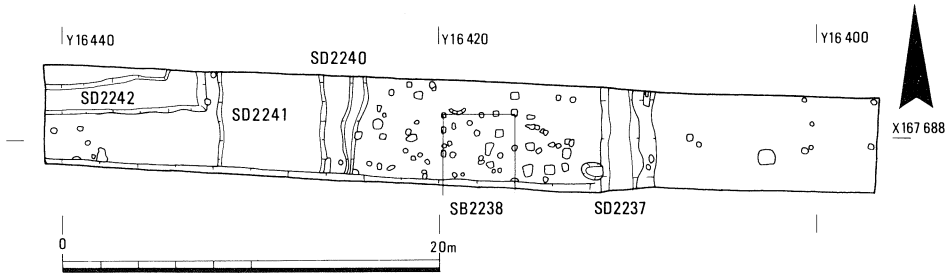
（1988年3月～4月）

この調査は、農道新設工事に伴う事前調査として橿原市南浦町で実施したものである。農道は幅6mで総延長590mにわたって新設される計画であり、今回は初年度分として、東西44m・南北5.5mの範囲の調査を行った。調査地は、国指定史跡大官大寺寺域北限の北方約100mの水田で、香久山の南麓の末端部に位置する。藤原京の条坊呼称では左京九条四坊東北坪にあたり、当地区の土地利用状況の把握を目的に調査を行った。

層序は、耕土、灰褐色土、黄灰色土、整地土、暗灰色粘土（地山）となる。整地土は地表下0.7m前後にあり、黄色ないし橙色をした山土を多く含む粘質土からなり、西に厚く、東に薄い。厚さは0.6～0.7mである。この整地は同層から出土した7世紀前半代の土器や後述する遺構の状況を考慮すると7世紀中頃までには終了したと考えられる。遺構の検出は整地土の上面で行った。

遺構　検出した遺構には小溝のほかに、南流する素掘溝3条、西流する素掘溝1条、建物1棟と約70個の小柱穴や浅い土坑状の凹みがある。

溝SD2240は調査区中央寄りにあり、炭化物を多く含む暗褐色粘質土が堆積する。堆積土からは7世紀中頃の土器が出土しているので、整地後すぐにこの溝が掘削されたとみられる。他の3条の素掘溝は藤原京期に属し、上層はいずれも焼土や炭化物を含んだ暗灰色粘質土を用いて埋め戻されている。溝SD2237は幅4m・深さ0.3mで、下層に灰色粘土、中層に砂混灰褐色粘質土が堆積する。溝SD2241は幅6m・深さ0.2mで、下層に灰色粘土が堆積する。両



第12図　第54－25次調査遺構配置図（1：400）

溝はほぼ方位に沿って南流しており、溝肩間の距離は14.6mとなる。溝SD2242は南流していたものが調査区内でほぼ西折している。幅は1.5m～2m、深さは0.3mで、下層に淡褐色砂質土が堆積する。これらの溝からは7世紀後半から藤原宮期にかけての土器が出土した。

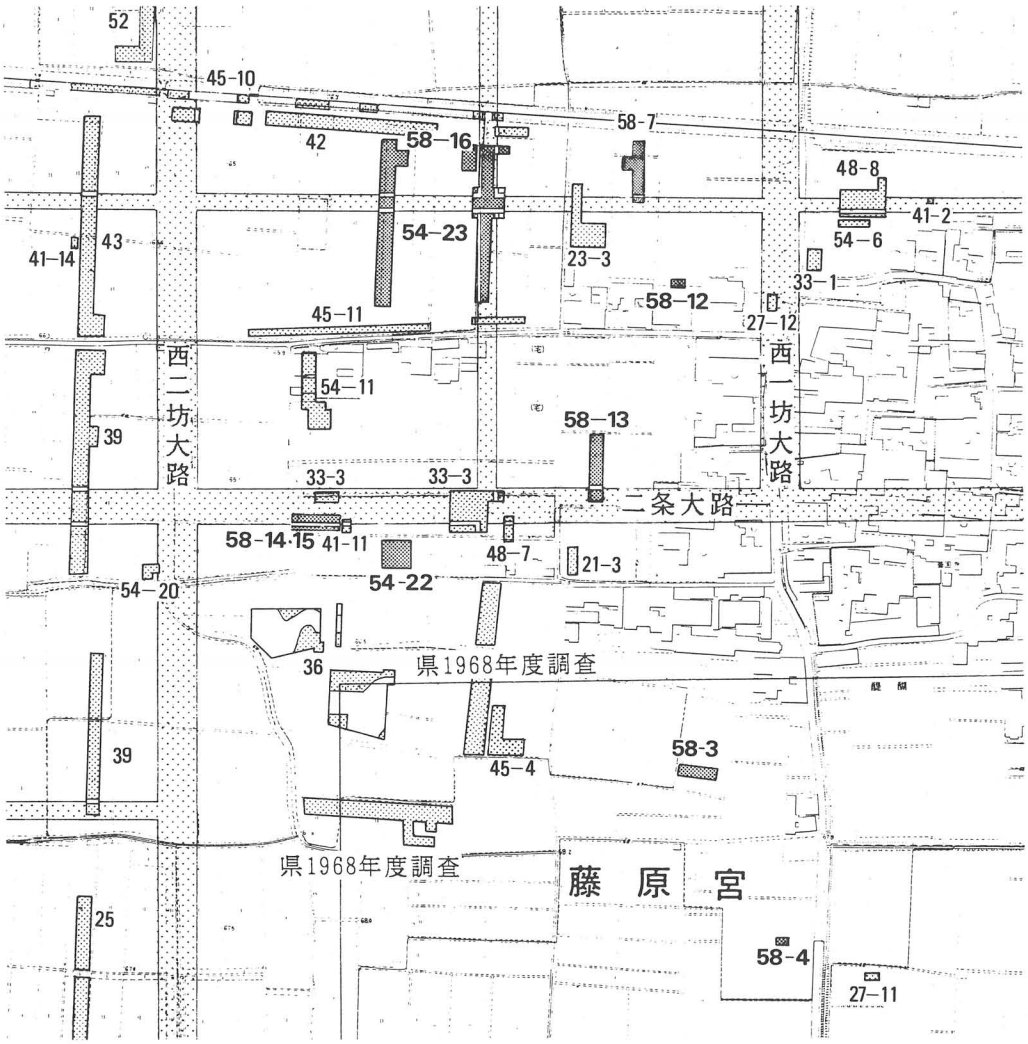
柱穴は主に溝SD2237とSD2241とのあいだで検出したが、建物としてまとまるのはSB2238のみである。桁行2間（3.8m）・梁行2間（3.6m）以上の南北棟である。柱穴からの出土遺物が皆無のため年代を確定し難いが、柱掘形の形状や周囲に平安時代前期の土器を出土する柱穴があることなどを考慮すると、平安時代に位置付けることもできる。その他の柱穴は一辺0.5m前後のものと0.3m前後のものに大別できる。出土土器からみて前者は7世紀代、後者は平安時代以降と考えられる。なお柱穴は深いものでも僅か0.3m前後であり、この地区が後世に相当削平されたことを示している。

遺物　出土遺物には7世紀中頃から8世紀初めにかけての土師器、須恵器のほかに土馬、円面硯、ルツボ、フイゴ羽口、銅滓、大官大寺所用瓦片、さらに円筒埴輪や金環などもある。

まとめ　今回の調査によって、当地区の古代における土地利用形態について新たに二つの知見を得た。一つは7世紀中頃には完成していたとみられる大規模な整地土の存在である。同様の整地は、調査地の西方約300mでもすでに確認されており、藤原宮成立前の飛鳥諸宮の造営との関連で理解されている（耳成線第2次調査、概報12）。今回の確認によって、その整地は東西400m、南北330mの範囲に及んでいることが判明した。さらに藤原京期の遺構は素掘溝のみである。このうち、南北溝SD2241、SD2237は東四坊坊間路心から東へ各々約52m、約72mの位置にあたる。その位置や規模からみて、単に宅地を分割するだけの溝とは考え難く、おそらく香久山南麓一帯の基幹排水路の機能を有していたものと推定される。今回の調査は道路敷という限定された調査であったため、整地に伴う施設や藤原京期の建物等は未検出である。今後の周辺の調査が期待される。

2．　右京二条一・二・三坊の調査（第58―７次等）

この地域は藤原宮の北側にあって、外周帯をはさんで藤原宮に接するという、きわめて重要な場所にあたっている。この地域一帯は、開発の速度が特に速いこともあって、調査件数が多い。このため、藤原宮・京関係の資料、なかでも条坊遺構に関する資料が特に沢山蓄積されている。本年度においてもこれらに関する重要な知見の追加があいついだので、ここにこの地域の調査をまとめて報告することにする。



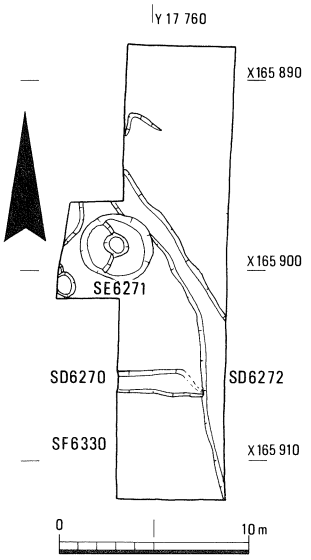
第13図　右京二条一～三坊周辺図

a　第58－７次調査

（1988年７月）

この調査は駐車場造成に伴う事前調査として橿原市醍醐町で実施した。調査地は右京二条二坊にあって、南半に二条条間路北側溝が予想されていた。調査区の層序は上から順に耕土、床土、灰褐色土、暗褐色砂質土であり、地表下0.6ｍで茶褐色粘質土の地山面となる。遺構の検出はこの地山面で行った。

検出した遺構には、藤原京期の東西溝とそれ以降の井戸、斜行溝などがある。



第14図　第58－７次調査
遺構配置図（１：400）

東西溝SD6270は幅1.1ｍ・深さ0.15ｍで、暗灰色粗砂が堆積している。遺構の遺存状態はきわめて悪く、特に東半は痕跡が残る程度であった。この溝からは、藤原宮期の土器が少量出土している。次節で報告する二条条間路と西二坊坊間路の交差点位置を確認した第54—23次調査の成果と出土遺物からこの溝を二条条間路の北側溝と考えることができる。

斜行溝SD6272は幅1.6ｍ、深さ0.3ｍで流水による灰色砂が厚く堆積する。調査区内を南北に蛇行して流れており、自然流路と考えられる。ここからは瓦器の小片が出土している。

井戸SE6271は径3.8ｍのほぼ円形で、深さは1.8ｍである。壁はほぼ垂直に掘られ、中心部が一段深い。井戸枠は残っていない。下層には黒褐色の粘土が堆積し、上層は褐色粘土・黄色粘土で人為的な埋土に埋めたてられている。埋土からは12世紀後半から13世紀にかけての瓦器が出土している。斜行溝SD6272より新しい。

今回の調査で、二条条間路北側溝を確認することができた。また調査区の位置は東北坪の東西中心線にほぼあたっていたが、坪内の区画施設や建物等の藤原京に関連する遺構を確認することはできなかった。

b　第54—23次調査

（1988年2月～4月）

この調査は、私道建設に伴う事前調査として橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は右京二条二坊の中央部分にあたり、条間・坊間両路の交差点を含む条坊関連遺構の存在が予想された。このため、調査は道路予定地全域を対象とし、東区（東西6m・南北68m）と西区（東西6.6m・南北73m）の2本の調査区を設けて行い、遺構の状況により一部を拡張した。調査区の層序は上から耕土、床土、暗褐色土の順であり、藤原京期を含む大半の遺構は、この暗褐色土上面で検出した。この層序は、東西両調査区とも基本的に同様である。調査の結果、西二坊坊間路とその東西両側溝、二条条間路とその南北両側溝、および両路の交差点、井戸3基などを検出した。

東区の調査　西二坊坊間路SF1082は、調査区の輪郭線にほぼ重複して検出した。坊間路の溝心心距離は約6.5mである。その東側溝SD6334・6335は幅1.2m・深さ0.2m、西側溝SD6336・6337は最大幅2m・深さ0.2mである。このうち西側溝は、二条条間路との交差点以南では、痕跡的にしか確認できない。二条条間路SF6330は、調査区の中央部やや北寄りで検出した。条間路は坊間路と同じく溝心心距離で約6.5mある。その南側溝SD6331は幅1.3m・深さ0.15m、北側溝SD6332・6333は幅1.2m・深さ0.3mである。

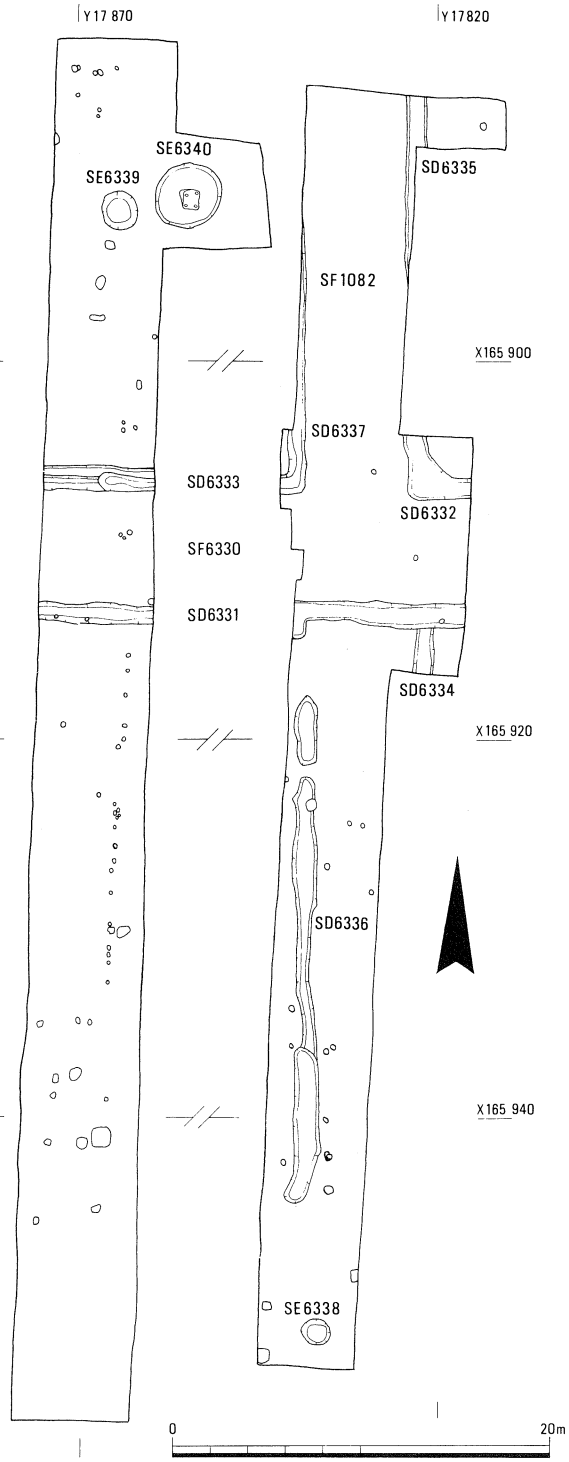
西二坊坊間路と二条条間路が交わる交差点の状況は、交差点北側では坊間路の東西両側溝SD6335・6337と条間路北側溝SD6332・6333がそれぞれL字形ないし逆L字形に接続している。これに対し、交差点以南の坊間路東西両側溝SD6334・6336は、削平をうけてやや不明確な点も残るが、条間路南側溝SD6331にそれぞれがT字形に接続していたようだ。北西に下がる地形から考えると、条間路以南の水は条間路南側溝に集めて西に流し、条間路北側溝の水は坊間路東側溝を経て北へ、また交差点の水は条間路北側溝と坊間路西側溝に分け、それぞれ西と北へ流したものであろう。

調査区南端で円形の掘形をもつ井戸SE6338を検出した。直径1.1m・深さ0.8mの浅いもので、井戸枠などはみられない。これは11世紀代に属す。

西区の調査　調査区中央北寄りで、東区で確認した二条条間路SF6330とその南北両側溝の西延長部分を検出した。南側溝SD6331は幅１ｍ・深さ0.25ｍ、北側溝SD6333は幅1.3ｍ・深さ0.2ｍである。

この他、条間路の北方で井戸２基を検出した。東側で確認した井戸SE6340は、直径3.5ｍの円形の掘形を持ち、中央部に横板組の方形の井戸枠があった。枠組は四隅に角柱を立てて横板を固定するもので、内寸法は一辺0.9ｍ・深さ3.5ｍの規模である。横板15段分を残し、井戸底部には玉石が敷かれていた。井戸枠の内部には暗灰色粘土層が堆積しており、その下部などで藤原宮期の完形土器が多数出土した。その内訳は、須恵器の杯Ｂ２点・平瓶７点・俵形瓶１点・甕１点、土師器の杯Ａ２点・杯Ｃ１点・甕７点である。この内、甕には墨や箆で記号を記したものがある。

西側の井戸SE6339は径1.9ｍ・深さ1.7ｍの円形の掘形を持ち、中央部に井戸枠を抜き取った



第15図　第54－23次調査遺構配置図（１：400）

痕跡をとどめる。出土遺物からみて11世紀代の遺構であろう。

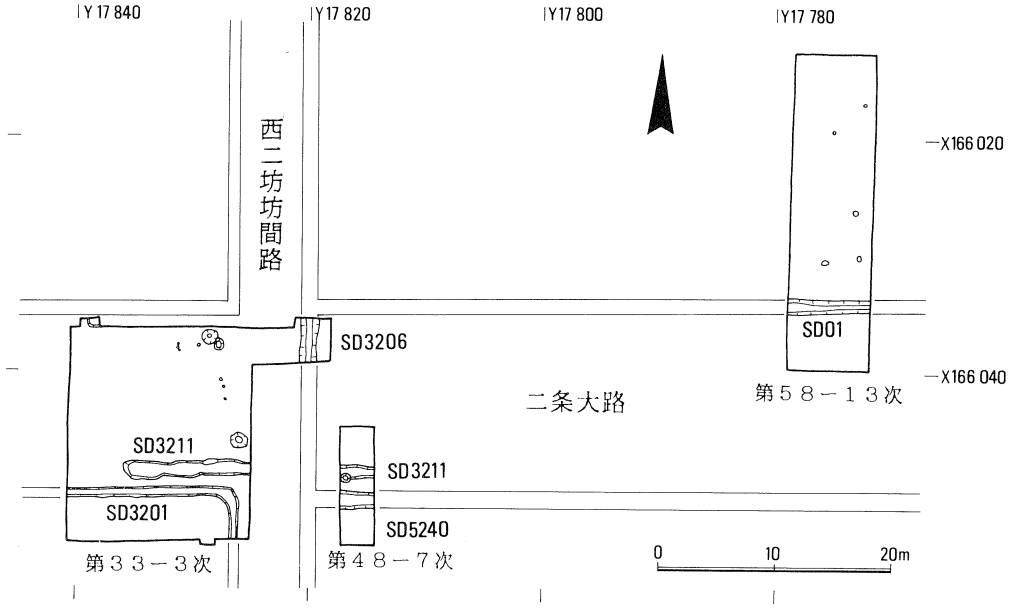
まとめ　本調査では、当初の予想どおり、西二坊坊間路と二条条間路の交差点を検出し、藤原京の条坊を復原する上に、一つの新たな手がかりを得ることができた。ただし、宅地内の状況を復原する上に重要な遺構、とくに建物や塀などの遺構は確認できなかった。そんななかで、今回検出した井戸SE6340は右京二条二坊西北坪の東南隅付近に位置しており、15段以上にも積み上げた井戸枠の規模からしても、宅地内で重要な役割を担っていたものと思われる。おそらく周囲には、井戸に伴う建物などが建っていた可能性は高く、今後の調査の進展に期待したい。

c　第58—13次調査

（1988年11月～12月）

この調査は住宅新築に伴う事前調査として橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は右京二条二坊東南坪の西南部で、南端部は二条大路の想定位置である。

調査は東西７ｍ・南北27.4ｍの調査区を設けて行った。調査区の層序は上から耕土、床土、灰色砂質土ないし褐灰色粘質土があり、その下が藤原京期の遺



第16図　第58－13次調査遺構配置図（１：600）

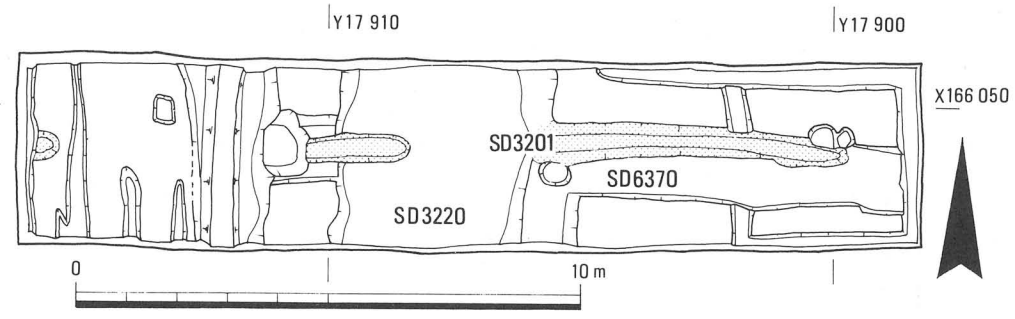
構検出面となる。検出面は南が高く北に低い。北半では灰褐色砂質土ないし暗灰色粘質土の地山が露呈し、南半には東南から西北へ向かう古い河川がある。検出した遺構は東西溝１条と小穴数個である。東西溝SD01は、二条大路北側溝にあたる。幅1.3～1.4m・深さ0.45mの素掘溝で、底に灰緑色粘土が堆積し、淡褐色粘土で埋められている。溝中から藤原宮期の土器・軒平瓦が出土した。二条大路南側溝は当調査区の南西約40mの第33―３次・48―７次調査区（概報12・17）で検出しており、二条大路の幅員は15.0m、両側溝心心距離は16.4mと復原できる。これは第39次調査での成果（幅員15.2m、側溝心心距離16.2m、概報15）とほぼ一致する。坪内については、坪の外周を区画する塀などの施設や建物は検出できなかった。

d　第58―14・15次調査

（1988年12月）

この調査は橿原市醍醐町における共同住宅および農業用倉庫の新築に伴う事前調査として実施したものである。当該地は藤原宮に北面する二条大路にあたる。また藤原宮西面外濠は第36次調査で北隅から西へ振れることを確認してはいるが、北延長位置で現在の水田面が大きな段差を生じており、これが旧地形を反映したものか否かが注目された。このため二条大路の南側溝想定位置に東西２枚の水田をまたいで東西18m・南北４mの調査区を設定した。

東区の層序は上から耕土、床土、暗灰褐色粘質土、灰褐色砂質土、明灰色粘質土となる。検出した主な遺構は東西溝２条と南北大溝１条である。東西溝S



第17図　第58－14・15次調査遺構配置図（１：150）

D3201・6370は明灰色粘質土上面で検出したものでほぼ同位置で重複している。東西溝ＳＤ3201は最大幅0.9ｍ・深さ0.15ｍで、東区の両端での溝底は西で0.2ｍ低い。この溝を第33―３次調査東区で検出した二条大路南側溝の西延長部と理解すると、西で南に約10分振れている。東西溝SD6370は幅0.13ｍ・深さ0.05ｍほどが残り、溝底はほぼ平坦である。西端では急な落ち込みがあり西側との地形の段差が生じた時点で機能していたものと思われる。南北大溝SD3220は幅４ｍ・深さ0.6ｍほどで、１層上の灰褐色砂質土面で掘り込んでいる。第33―３次調査西区で検出した遺構と一連と考えられる。存続年代は明らかでないが埋土を覆う暗灰褐色粘質土には瓦器を含む。

西区では床土下の暗茶褐色土上面で、中世以降の浅い南北溝と小穴のほか、西端で東区で検出した南側溝SD3201の延長部を確認できた。溝底は東区西端よりさらに0.2ｍ下がっている。遺構面は東区より0.4ｍ低いが削平された形跡が強く、本来は西側になだらかに傾斜していたものと考えられた。

ｅ　第58―８次調査

（1988年８月）

この調査は住宅建設に伴う事前調査として橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は右京二条三坊の東北坪にあたり、第41―16次調査（概報15）の成果からすると一条大路の存在も予想された。このため東西３ｍ・南北11ｍの調査区を設けて調査したが、藤原京期の明確な遺構は検出できなかった。

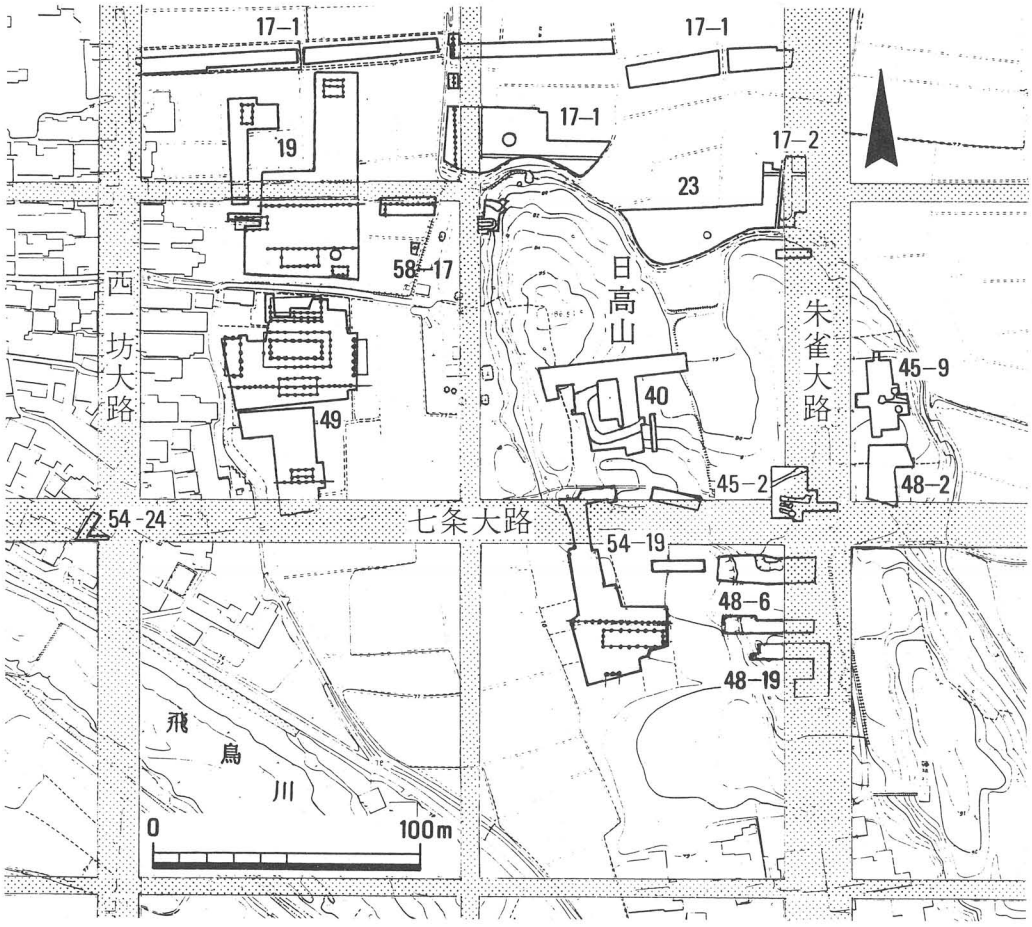
ｆ　第58―12次調査

（1988年11月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は右京二条二坊東南坪にあたる。東西５ｍ・南北３ｍの調査区を設けて調査した。藤原京期の遺構は検出されなかったが、中世の環濠の一部である可能性の高い沼状の落ち込みと、東南隅で柱穴１を検出した。

3. 右京七・八条一坊の調査（第54—19次等）

藤原宮の朱雀門の南には南東から北西方向にむけて日高山が横たわっており、この西側には飛鳥川が日高山にほぼ平行して流れている。日高山と飛鳥川にはさまれた右京七条一坊西南坪では、第19次調査と第49次調査（藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告）が実施されており、一町規模で整然と配置した邸宅の遺構がみつかっている。今回の２件の調査地のうち１件は、七条大路と西一坊坊間路をはさんだ南東側に位置しており、調査面積が大きいので、同規模の建物群の検出が大いに期待された。もう１件の調査地は七条大路にあたっていたので、その手がかりを得るのを目的とした。



第18図　右京七・八条一坊周辺図

a　第54－19次調査

（1987年12月～1988年３月）

この調査は道路建設・グランド造成の事前調査として、橿原市上飛騨町で行ったものである。調査地は、日高山のほぼ中央の面斜面から、その山裾を西に降りた平坦地までおよんでいる。藤原京の条坊でいえば、七条大路をはさんで北側でわずかに右京七条一坊東南坪にはりだしており、大部分は南側の同八条一坊東北坪に属す。

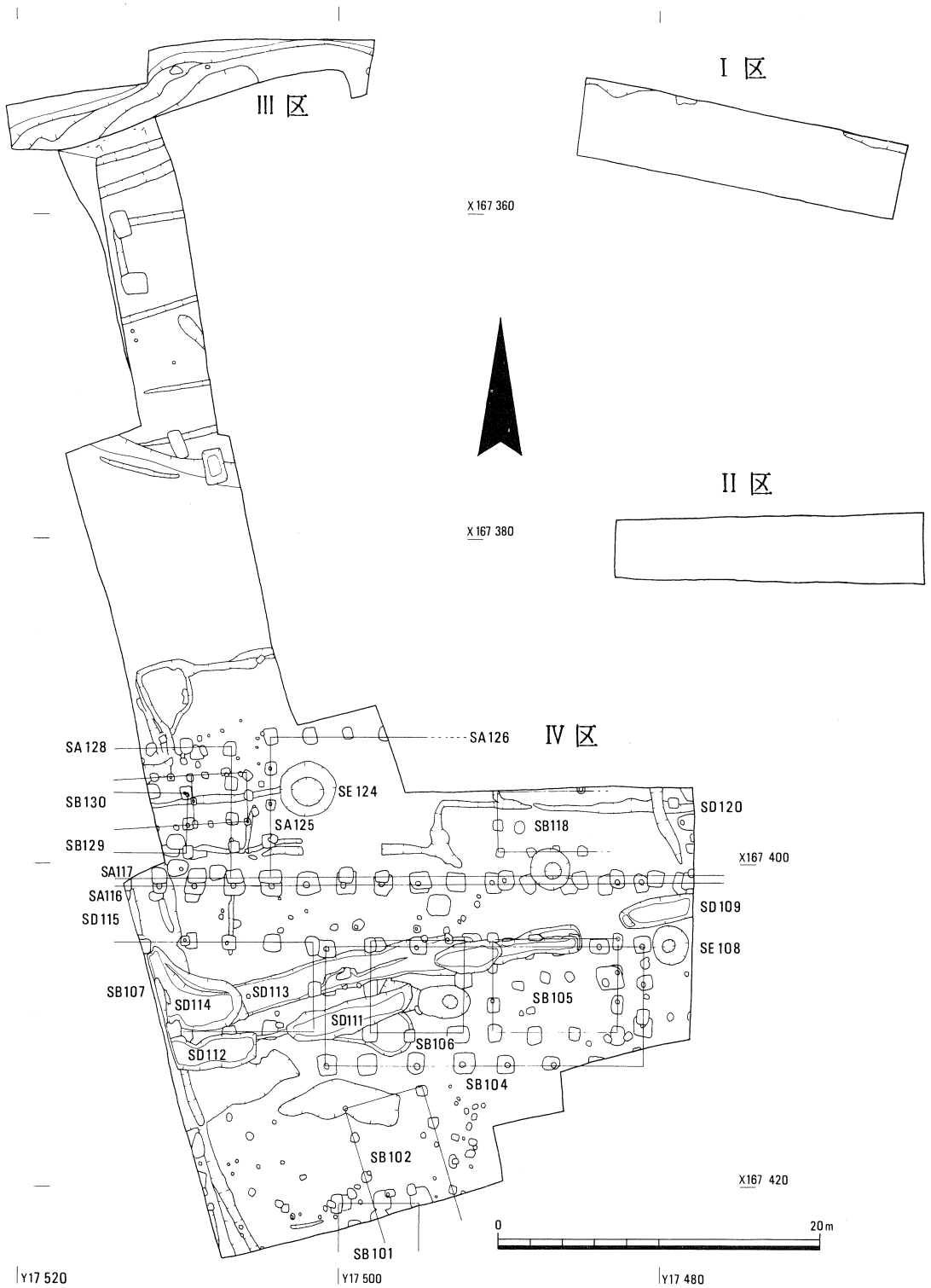
調査は４箇所に分けて行った。

Ⅰ区　調査地の北東部に設けた東西約20m・南北約５mの調査区である。表土を取り除くとすぐ花崗岩質の地山になった。ここは日高山の西斜面にあたっており、地山面の高低差は東端と西端で約0.7mある。遺構は現代のものに限られており、北側への落ちが３箇所あった。

Ⅱ区　Ⅰ区の南約20mに設定した東西約20m・南北約４mの調査区である。地表面から、東端で約1.7m、西端で約3.2m掘り下げたが、土層は赤褐色砂質土の現代置土に限られていた。第48－６次調査（概報17）が本調査区の東に約４m隔てた位置で行われている。その成果と組み合わせれば、日高山の西斜面はきわめて急角度に落ちていることを示している。

Ⅲ区　調査地の東北端でⅠ区の西側約15m隔てて設けた東西約24m・南北約４mと、東西に長い調査区である。表土の直下は花崗岩質の地山である。日高山の西斜面にあたっており、西端から西10m足らずで平坦地に達する。東端と西端との高低差は約2.1mである。また北にもゆるやかな落ちがある。現在調査区の南側は崖面を呈しており、高低差は約2.8mある。この調査区でも藤原京に関連した遺構はみつからなかった。

Ⅳ区　Ⅲ区の南に接して設けた調査区で、２度南側に拡張したこともあって、調査区の外形は不整形となった。東西約36m・南北約70mの範囲におよぶ。層序は北端、中央、南端で異なる。北端では、赤褐色砂質土を取り除くと、すぐ花崗岩質の地山となる。中央付近では、上から、赤褐色砂質土、暗緑色砂質土、茶色土、茶灰色砂質土、赤褐色土、暗褐色土、それから花崗岩質の地山となる。



第19図　第54－19次調査遺構配置図（１：400）

このうち赤褐色土は藤原京期の整地層、暗褐色土は7世紀前半の土器を含む包含層である。南端では、上から、赤褐色砂質土、淡茶褐色土、茶褐色土、礫混褐色土、黄褐色土、赤褐色土、礫混褐色砂となる。このうち、礫混褐色砂が地山である。遺構検出面は、北半部で花崗岩質の地山面、南半部で赤褐色土の上面かこれを取り除いた面で行った。この調査区で南半部に限って、藤原京期や中世などの時期の遺構がみつかった。

遺構

検出した遺構には、掘立柱建物、掘立柱塀、素掘溝、石組井戸などがあり、これらは主に7世紀、藤原京期、中世に属す。

7世紀の遺構　溝ＳＤ120がこれにあたる。Ⅳ区の中央を屈折しながら、ほぼ西に流れる小溝で、幅約0.6ｍ・深さ0.05～0.1ｍである。

藤原京期の遺構　この時期の遺構は柱穴の重複関係などから、Ａ・Ｂの2時期に分けることができる。なお、どちらの時期の遺構も、国土方眼方位で北に対してほんのわずか西に振れている。

（Ａ期）掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条がある。

ＳＢ104は、南半中央にある大規模な掘立柱東西棟建物である。桁行7間（19.6ｍ）・梁行3間（7.2ｍ）。柱間寸法は桁行2.8ｍ、梁行は2.4ｍである。柱掘形は、やや不揃いだが、一辺0.9～1.3ｍで方形を呈する。断ち割り調査を行った柱穴では、南側柱穴に限って、底に拳大の礫を厚さ0.1～0.3ｍほど敷き詰めているものがみつかっている。また南側柱列東第2柱穴では、山土混褐色土と茶色粗砂を厚さ0.05ｍずつ交互に入れて版築状につき固めた状況が確かめられた。柱掘形の深さは現状で0.3～1.0ｍほどである。柱は、抜き取られた形跡はなく、それとわかるものはすべて柱痕跡があった。また北東隅柱穴や南側柱列東第6柱穴では柱根がわずかに残っていた。

ＳＢ101は、調査区南端にかかった、南北棟とみられる掘立柱建物である。調査区内には、北側柱2間分（4.8ｍ）のみを検出した。柱間寸法は2.4ｍである。柱掘形は、一辺1.1～1.3ｍで、方形を呈する。深さは0.5または0.6ｍであった。

ＳＡ116は、南半にあって、東西に延びる掘立柱塀である。東方・西方とも調査区外に延びる。調査区内で15間分（34.8m）を確認した。柱間寸法は多少ばらつくが、2.32m前後である。柱掘形は一辺1.1～1.4mで、方形を呈し、深さは現状で0.6～0.9mほどである。なお柱を抜き取った形跡はない。

（Ｂ期）　掘立柱建物５棟、掘立柱塀５条がある。

ＳＢ105は、南半東端にある掘立柱の東西棟建物である。この建物の北側柱筋はＡ期の建物ＳＢ104のそれの北約0.6mにある。さらに北側柱筋と南側柱筋は、この西に並ぶ建物ＳＢ106・107に一致する。桁行３間（7.8m）・梁行３間（5.85m）。柱間寸法は、桁行2.6m・梁行1.95mである。柱掘形は、一辺が、0.7～1.0mで、方形を呈する。

ＳＢ106は、南半中央にある掘立柱の方形とみられる建物である。桁行と梁行がともに２間（5.4m）で、柱間寸法は2.7mである。柱掘形は、一辺が0.7～1.2mで、方形を呈する。東妻柱穴の断ち割り調査を行ったが、それによれば、この柱穴は、現状の深さが約0.8mで、山土混褐色土や淡茶色砂質土などを厚さ0.05～0.1m程度ずつ入れて版築状につき固めていた。

ＳＢ107は、南半西半にある掘立柱の東西棟建物である。桁行は４間以上（10.52m）、梁行は２間（5.4m）である。柱間寸法は桁行2.63m・梁行2.7mである。柱掘形は一辺が0.9～1.1mの方形を呈する。

ＳＢ118は、中央東半にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間以上（5.2m）・梁行２間（3.8m）。柱間寸法は桁行1.73m・梁行1.9mである。柱掘形は、一辺約0.5mと小さく、方形を呈する。

ＳＢ129は、中央の西半にある東西棟の掘立柱建物である。北側柱１間以上（2.2m）、東側柱２間（3.8m）のみを検出した。梁行の柱間寸法は1.9mである。柱掘形は、ＳＢ110よりやや大きく0.7mで、方形を呈する。

ＳＡ117は、塀ＳＡ116の位置を基本的に踏襲した掘立柱の東西塀である。調査区内では、桁行15間分（35.3m）検出した。柱間寸法は不揃いで2.4m前後である。柱掘形は、一辺約0.7mで、方形を呈する。深さは現状で0.7m。

ＳＡ125は、塀ＳＡ117で調査区内の西第５柱穴から北に伸びる掘立柱の南

北塀である。桁行4間（8.6m）で東方向に鍵手状に折れ曲がる。柱間寸法は、2.15mである。ＳＡ126は、塀ＳＡ125の北隅の柱穴から始まる。桁行3間（7.3m）のみを、調査区内で検出した。柱間寸法は、2.43mである。塀ＳＡ125とＳＡ126の柱掘形はともに、一辺0.8m前後で、方形を呈する。なお建物ＳＢ118は、塀ＳＡ117・125・126で囲まれている。

ＳＡ127も、調査区内の塀ＳＡ117の西第4柱穴から北に伸びる掘立柱の南北塀である。桁行4間（7.8m）で西方向に鍵手状に折れ曲がる。柱間寸法は、1.95mである。ＳＡ128は、塀ＳＡ127の北隅の柱穴から始まる。桁行2間（5.0m）のみを、調査区内で検出した。柱間寸法は、2.5mである。塀ＳＡ127・128の柱掘形はともに、一辺0.8m前後で、方形を呈する。なお建物ＳＢ129は、塀ＳＡ117・127・128で囲まれている。

中世の遺構　掘立柱建物2棟、井戸2基、素掘溝5条などがある。

ＳＢ102は、南端にある掘立柱の南北棟建物で、国土方眼方位に対して、北で西にかなり振れている。桁行3間以上（6.5m）・梁行2間（5.0m）と思われるが、妻柱穴はみつかっていない。柱掘形は、直径約0.7mである。

ＳＢ130は、中央西端にある掘立柱の東西棟建物で、国土方眼方位に対して、北で西に振れている。桁行5間以上（5.7m）あり、東から3間目の位置に間仕切りがある。梁行は2間（2.9m）。柱間寸法は、桁行2.85m・梁行1.45mである。柱掘形は一辺約0.4mで、ほぼ方形である。

ＳＥ108は、南半東端にある石組井戸である。平面形は、円形で直径約1.8m、深さは現状で約0.9mある。底面には直径0.35m・高さ0.26mの曲物を据えていた。井戸の掘形は、現状で直径約2.2mの円形をなしており、掘形内には人頭大の石を密に放り込んでいた。

ＳＥ124は、中央にある石組井戸である。平面形は、円形で直径約1.0m、深さは現状で約2.4mある。井戸の底部は花崗岩質の脆い岩盤に、直径約1.2m・深さ約0.75mで半球状に掘りくぼめていた。井戸の掘形は、直径約3.4mの円形で、掘形内の裏込めに、山土混青灰色砂質土や褐色土を用いている。

ＳＤ109は、南半東端の素掘溝である。幅約4.4m・深さ約1.1mである。

西に約3m隔てて溝SD113が、この南にあらたに溝SD111が掘られた。幅や深さは溝SD109とあまり変わらない。調査区の西端で溝SD114・112が溝SD113・111に接続して、南北に連なる。これらの溝には青灰色粘土や暗灰色粘土などの粘土が厚く堆積していたので、本来は濠状に水をたたえていたものと思われる。したがって、溝SD109とSD113の間が途切れているのは、ここが陸橋として利用されたためだろう。

中世の遺構には、環濠とみられる施設のほか、建物や井戸がみつかっている。これらが有機的にどのように関係するかは分からない。

遺物

その内容は、土器、陶磁器、瓦などで、年代は弥生時代から中世におよぶが、藤原京の時期のものは少なく、むしろ中世の遺物が豊富である。瓦類としては丸・平瓦のほかに、押捺パルメット紋軒平瓦が1点、四重弧文軒平瓦が1点、熨斗瓦が2点出土した。また井戸SE124から古瀬戸とみられる水注がほぼ完形で出土している。なお弥生時代の遺物に伴う遺構は検出していない。

まとめ

今回の調査地においては、藤原京に関する遺構はⅣ区南半に限られており、Ⅰ・Ⅲ区とⅣ区北半では、表土直下で花崗岩質の地山を確認したが、遺構はすべて現代のものであった。これらの調査区では、ここを通過することが想定されている七条大路の路面や側溝はいうにおよばず、坪の外郭を閉じる塀など藤原京の時期に属す遺構は後代の削平でことごとく失われたとみられる。

ここで、当坪の周辺で明らかになっている条坊遺構を手がかりにして、今回検出した藤原京期の建物の配置について検討してみよう。七条大路は検出できなかったので、第29—7次調査（概報11）で検出した六条大路と本薬師寺の西南隅で実施した調査（概報6）で検出した八条大路の位置から、七条大路の位置を割りだそう。八条条間路については第45—6次調査（概報16）の成果を使おう。また朱雀大路については第17—2・3次（概報7）の成果を、西一坊坊間路については第17次調査（概報6）の成果を用いることにする。

藤原京A期に建てられた塀SA116は、坪を南北に四等分する位置にほぼ相

当する。建物ＳＢ104では東西の中軸線は坪の中軸線の西約2.2ｍにあってややずれているが、南側柱筋は坪を南北に三等分する位置にほぼあたっている。

Ｂ期には、塀ＳＡ117を塀ＳＡ116の位置に基本的に踏襲して建てた。この塀の南側すなわち坪の内側に、３棟の建物ＳＢ105・106・107を建てたが、その北側柱筋を建物ＳＢ104の北側柱筋の位置のやや北側においたので、坪を南北に三等分する位置からほんの少しだけずれることになった。

この坪は、北側で推定七条大路心から南に坪の６分の１か５分の１ぐらい、東側で朱雀大路心から西に坪の４分の１か３分の１ぐらい、日高山が当坪のなかにせりだしていたとみなすことができる。たとえば東側の落差は特にきつく、第48―６次調査で検出した日高山の岩盤の傾斜変換点とⅣ区遺構検出面との高低差は、約5.1ｍにも達しているのである。

今回の調査によって、このように自然地形上の制約が特に大きい右京八条一坊東北坪に、藤原京期に２時期にわたって大規模な建物群が整然と建設されており、かつ坪のなかに条坊を割り付けの基準として建物や塀が配置されていたことが明らかとなった。七条大路こそ検出することはできなかったものの、この実例は、京内の土地利用の実態について検討する際、貴重な資料となろう。周辺地域でのなお一層の調査の進展が待たれる。

ｂ　54―24次調査

（1988年３月）

この調査は、道路建設に伴う事前調査として、橿原市飛騨町で実施したものである。調査地の基本層序は上から表土、焼土、暗褐色土、灰褐色砂礫となる。暗褐色土には近代までの遺物を含み、その上面からは旧幼稚園舎の撤去に伴う大型の焼土土坑が多数掘り込まれている。灰褐色砂礫層は高いところでは現地表下0.4ｍであるが著しく削平を受けており、藤原京期に遡る遺構は確認できなかった。

この砂礫層は隣接する飛鳥川によって形成されたものと判断される。なお、砂礫層からは遺物は出土していない。

4. 西京極大路（下ツ道）の調査（第58―5次）

（1988年6月～7月）

この調査は店舗新築に伴う事前調査として橿原市城殿町で行ったものである。ここには遺存地割などからも岸俊男説の藤原京西京極大路、下ツ道の存在が予想された。藤原京の条坊呼称では右京七条四坊にあたる。

下ツ道の東側溝を検出する目的で、当該地の南端と北端に東西16m・南北6mの2つの調査区を設定して調査したが、両調査区の様相が異なるため、東西6m・南北25mの拡張区を設けて結び、最終的に「I」字形の調査区となった。

調査地の層序は上から耕土、床土、赤褐色砂質土、赤褐色粘質土の順で、遺構は赤褐色粘質土の上面で検出した。

遺構　検出した主な遺構は4条の南北溝と溝をせきとめた溜りである。

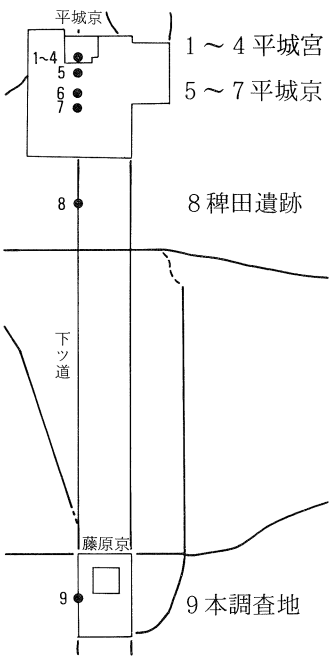
SD181は、下ツ道東側溝の検出面より1層下層で検出した古墳時代の南北溝で、幅0.8m・深さ0.3mである。

南北溝SD182は幅0.8m・深さ0.3mである。埋土は砂が中心で、底面は凹凸が激しい。

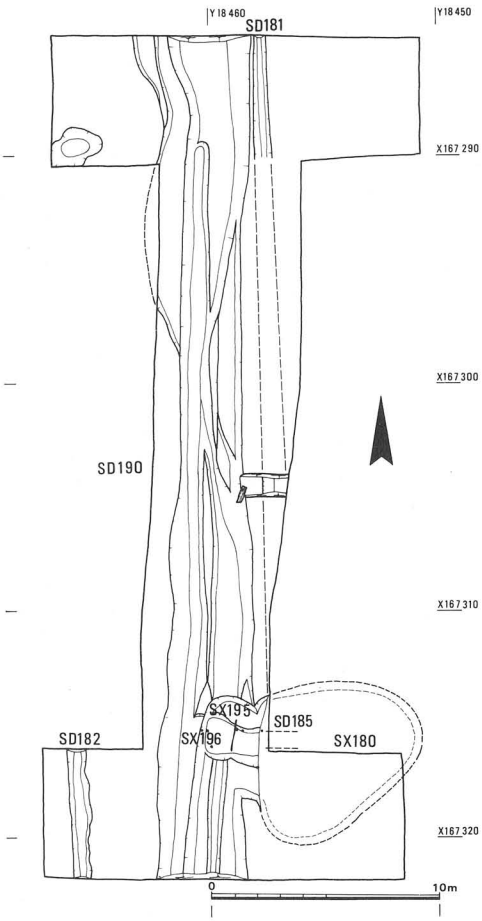
下ツ道東側溝SD190は南に流れる南北溝で、調査区の中央部以北では1条だが、南調査区では心がずれた古（A）・新（B）の2条がある。規模はともに幅1.5～2.5m・深さ0.8～1.2mである。

溜りSX195は調査地南端で下ツ道東側溝（古）SD190Aに伴って検出したものである。おそらくしがらみSX196を組んで水を貯めたのであろう。SD190Aの底面は、SX195の部分で約0.6m北側に比べて低い。

池状施設SX180はSD190Aの東にあって、溝と連なっていた。平面形は東西8m・南北7mの不整円形を呈するものと推定できる。SX180は埋ま



第20図　下ツ道関係調査位置図



第21図　第58－５次調査遺構配置図（１：300）

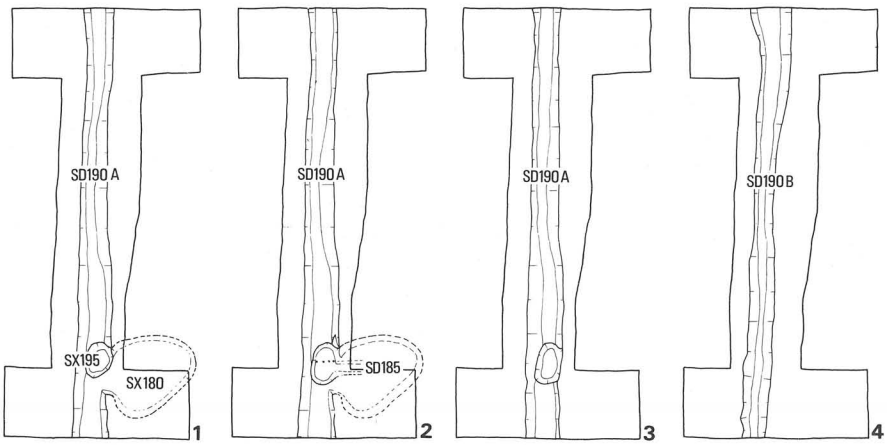
って東西溝ＳＤ185で東側溝ＳＤ190Ａとつながることもあった。

遺物　土器、木簡、木器、瓦、銭貨が出土した。その大半は下ツ道東側溝ＳＤ190からのものである。

土器は土師器、須恵器が出土した。ＳＤ190Ａから７世紀後半代の時期のものが出土しており、漆容器の須恵器の壺もある。ＳＤ190Ｂからは10世紀代の土器が出土しており、下ツ道ＳＦ200の存続期間の下限を推定できる。

木簡は４点出土したが墨痕を残すだけで釈読できない。木器には曲物側板・底板、匙、斎串、工具の柄などがある。

銭貨は萬年通宝１枚・神功開宝１枚がＳＤ190Ｂから出土した。



第22図　下ツ道東側溝変遷図

まとめ　今回の調査の最大の成果は藤原京域で初めて下ツ道を検出することができたことと、改修をへて10世紀まで下ツ道が存在したことを明らかにしたことの2点である。特に7世紀代の下ツ道東側溝は溜りＳＸ195を中心として何回かの改修が行われていることが注目できる。掘削当初の情況は不明であるが、

1.　溜りＳＸ195の東側に池状の施設ＳＸ180が設けられる。

2.　溜りＳＸ195と池状施設ＳＸ180が溝ＳＤ185で結ばれる。

3.　池状施設ＳＸ180が廃されて、溜りＳＸ195だけとなる。

という変遷をたどる。

下ツ道はこれまでに平城京内・平城京外で8箇所確認されている。これに今回の成果を加えると、表のとおり下ツ道が藤原京域までほぼ一直線に設定されてたことが判明し、測量技術の水準の高さをあらためて知ることができる。

	X	Y
4. 平城宮朱雀門下層	−145,903.72	−18,575.82
7. 平城京六条一坊	−147,830.70	−18,566.16
8. 稗田遺跡	−151,660.00	−18,547.00
9. 藤原宮第58−5次調査（藤原京右京七条）	−167,321.00	−18,459.85

第2表　下ツ道東側溝座標値

	NでW	距離
4 − 7	0° 17′ 14″	1,927.004m
4 − 8	0° 17′ 13″	5,756.352m
4 − 9	0° 18′ 37″	21,417.594m
7 − 8	0° 17′ 12″	3,829.348m
7 − 9	0° 18′ 45″	19,490.590m
8 − 9	0° 19′ 08″	15,661.242m

第3表　方眼方位との偏角

5. その他の調査概要

a　左京九条一坊の調査（第58－6次）

（1988年7月）

この調査は橿原市田中町において、住宅新築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は藤原京左京九条一坊東北坪にあたり、飛鳥川の東岸に位置する。東西2m・南北16mの調査区を調査した。飛鳥川の流水による堆積層を確認したにとどまり、藤原京に関連する遺構は一切検出されなかった。

b　右京三条三坊の調査（第54－20次）

（1988年1月）

この調査は橿原市醍醐町において、店舗新築に伴う事前調査として行ったもので、当該地は西二坊大路に位置する。調査区の東端で自然流路の西肩の一部を検出し、出土遺物からこの流路が中世まで生きていたことを確認した。

c　右京七条二坊の調査（第54－21次）

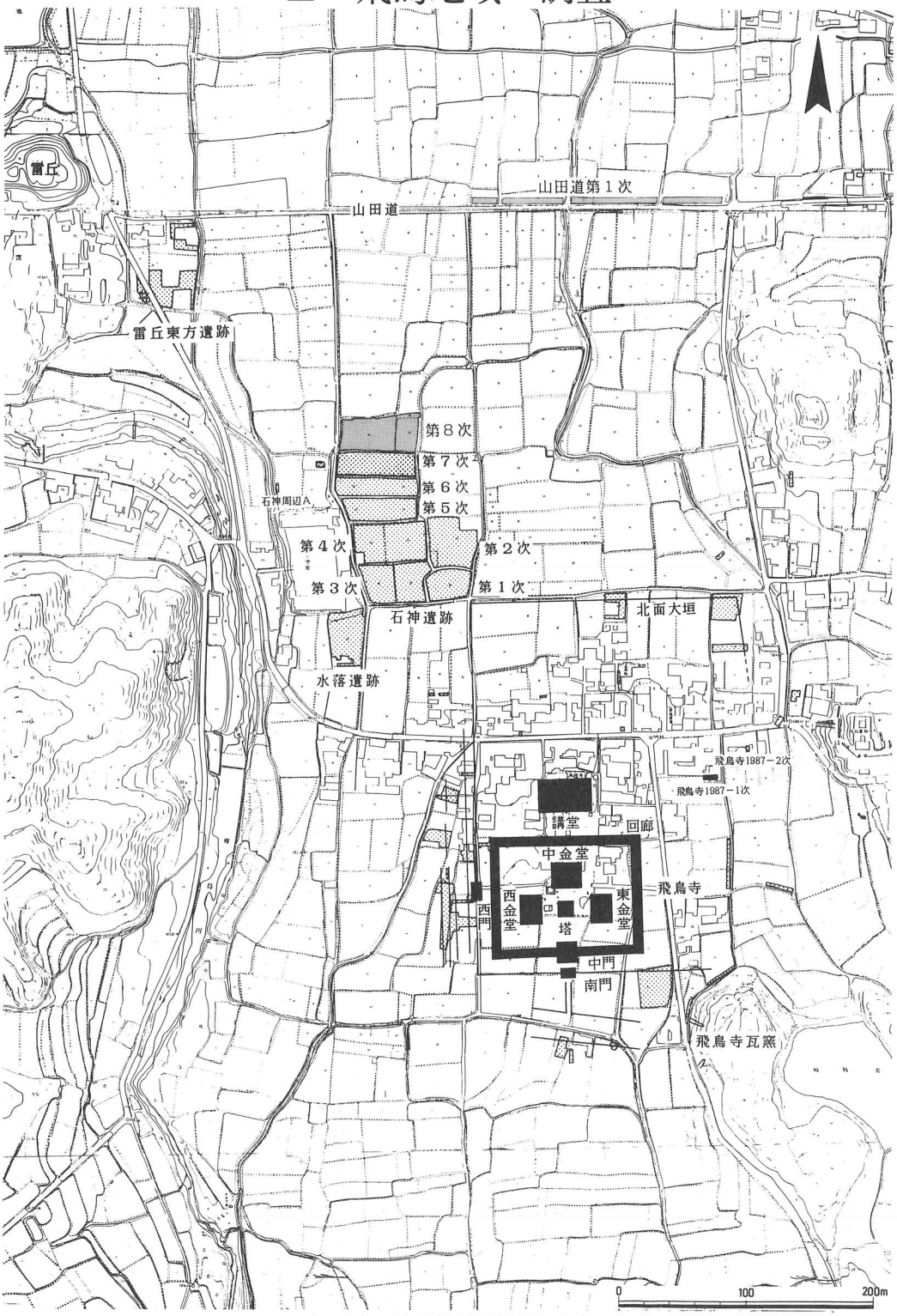
（1988年1月）

この調査は橿原市飛騨町において、宅地造成に伴う事前調査として行ったものである。暗褐色土の上面で中世の小規模な掘立柱建物1棟、塀1条、井戸1基および弥生時代の斜行溝3条と土坑2基を検出したが、藤原京期の遺構はみつからなかった。

d　右京九条二坊の調査（第58－10次）

（1988年8月）

この調査は橿原市城殿町において、宅地造成に伴う事前調査として行ったものである。調査は東西3m・南北20mの調査区を設けて実施したが、飛鳥川の氾濫によって著しく削平されており、予想された八条大路と西一坊大路の交差点は検出できなかった。



第23図　石神遺跡周辺調査位置図

1．　石神遺跡第8次調査

（1988年7月～1989年3月）

1981年以来毎年実施してきた石神遺跡の発掘調査は今年度で8回目を数えるに至った。水落遺跡の東北から調査を始め、順次北へと進んできており、今回対象としたのは第7次調査区の北に接する水田2枚である。面積は約1450㎡、第1次調査以来の調査総面積は約9250㎡に達した。その結果、石神遺跡はさらに北方へと続くが、今回調査区の半ば付近で南から展開してきた区画が一応完結することが判明した。また、従来その区画の西外郭施設かと考えていた長廊状建物もほぼ同位置で終わって北側に西へのびる東西棟が建ち、これらが西側の別の区画の東および北を区画する施設であることも明らかとなった。そこで、第8次調査の成果をあらまし報告した後に、第1次調査以来の検出遺構について中間的なとりまとめを行っておくことにしよう。

遺　構

調査区の基本的な層序は、上から耕土、床土、赤褐色粘質土、褐色砂質土の順で、その下が遺構検出面となる。調査区東半では小石混じりの砂質土が、西半では黒褐色の整地土が主として遺構面を形成し、東3分の1ではすぐ下が褐色砂礫の地山になるが、以西の地山がだんだん下がり、したがって整地土層が徐々に厚くなる。調査区東西両端での遺構検出面の比高差はあまりなく0.2～0.4m程度であるが、地山の比高差は0.6～0.7mとかなり大きい。

検出した遺構は7世紀前半から中世にかけての時期のものである。主な遺構は7世紀中頃から8世紀初頭に属し、重複関係や造営方位の違い、柱穴の掘り込み面や埋土の状況、出土遺物などによって、大きく次の4時期に分けて理解してきた。A期――7世紀中頃（斉明朝）、B期――7世紀後半（天武朝）、C期――7世紀末（藤原京期直前）、D期――7世紀末～8世紀初頭（藤原京期）である。今回の調査によって、B・C両期を一体として捉えたほうが的確ではないか、とする考えが浮上してきた。すなわちB・C両期を区分した理由としては、互いに重複する遺構があること、造営方位に差があること、B期に

総柱建物が多くC期に小規模な南北棟が多いこと、および柱穴等の埋土に違いが認められることの4点であった。しかしながら、重複はごくわずかで、同一時期内の改作とみても支障はなく、方位の振れも各期内でさえ一定しない。しかもB・C期に分割すると建物がまばら過ぎるのである。今後はB・C期をまとめてB期とし、従来のD期をC期と呼び直すことにしたい。

A期　飛鳥寺と水落遺跡の北方に東西大垣SA600を作り、これを南限とする石神遺跡の広大な区画が形成された時期である。遺構はほぼ真北に沿って造営されている。掘立柱建物の柱を立てた後に整地したため、整地土で覆われた柱掘形が多い。抜取りに際しては、柱をまっすぐ上に引き抜いた後黄色の山土で丁寧に埋め戻しており、整地土上面で抜取穴がくっきりとみえる。掘立柱建物8棟、石組溝7条、素掘溝3条、2種の石敷などがある。

前回の調査まで、A期の遺構は、第4次調査区の石敷を巡らした井戸SE800から北へ延びる石組溝の変遷などを手がかりにして、A－1期、A－2期、A－3期の3小期に細分してきた。今回、A－2期よりは古くA－1期より新しいと考えざるを得ない遺構をいくつか検出した（調査中は「A－1.5期」と仮称)。新たな細分法を設定する必要があろうが、出土遺物の検討を経ておらず、また遺構は溝に限られ建物等の構築物はないので、ここでは従来の時期区分を踏襲し、A－1期に含めて扱うことにする。

〔A－1期〕石組溝と素掘溝あわせて6条がある。　SD1210は調査区中央やや西寄りにある南北石組溝である。A－2期以降の遺構を掘り下げた段階でその一部を検出したにすぎないが、人頭大の河原石を積んだ内法幅0.2～0.3mの狭い石組溝で底石はない。このSD1210は第6次調査で初めて検出したもので、側石が3段まで遺存しており暗渠であろうと考えたが、今回は底の1段が残るのみであった。幅が狭いため水があふれたようで、溝の上端より上まで砂が堆積していた。

SD1328は調査区中央やや西で、整地土を下げてその一部約7mを検出した、東北へ向かって斜行する溝である。幅1.0m・深さ0.5mほどで、もとは石組の護岸があったようだがすべて抜き取られており、底石はない。底部で前述の

ＳＤ1210がみつかった。

ＳＤ1345は調査区中央で、土坑の底で一部分を検出した南北石組溝。底での幅1.3ｍ・深さ0.6ｍの掘形内に人頭大の石を３段以上、上幅が広くなるように積んである。開渠であろう。すぐ西にあるＡ－２期の暗渠ＳＤ900より古い。

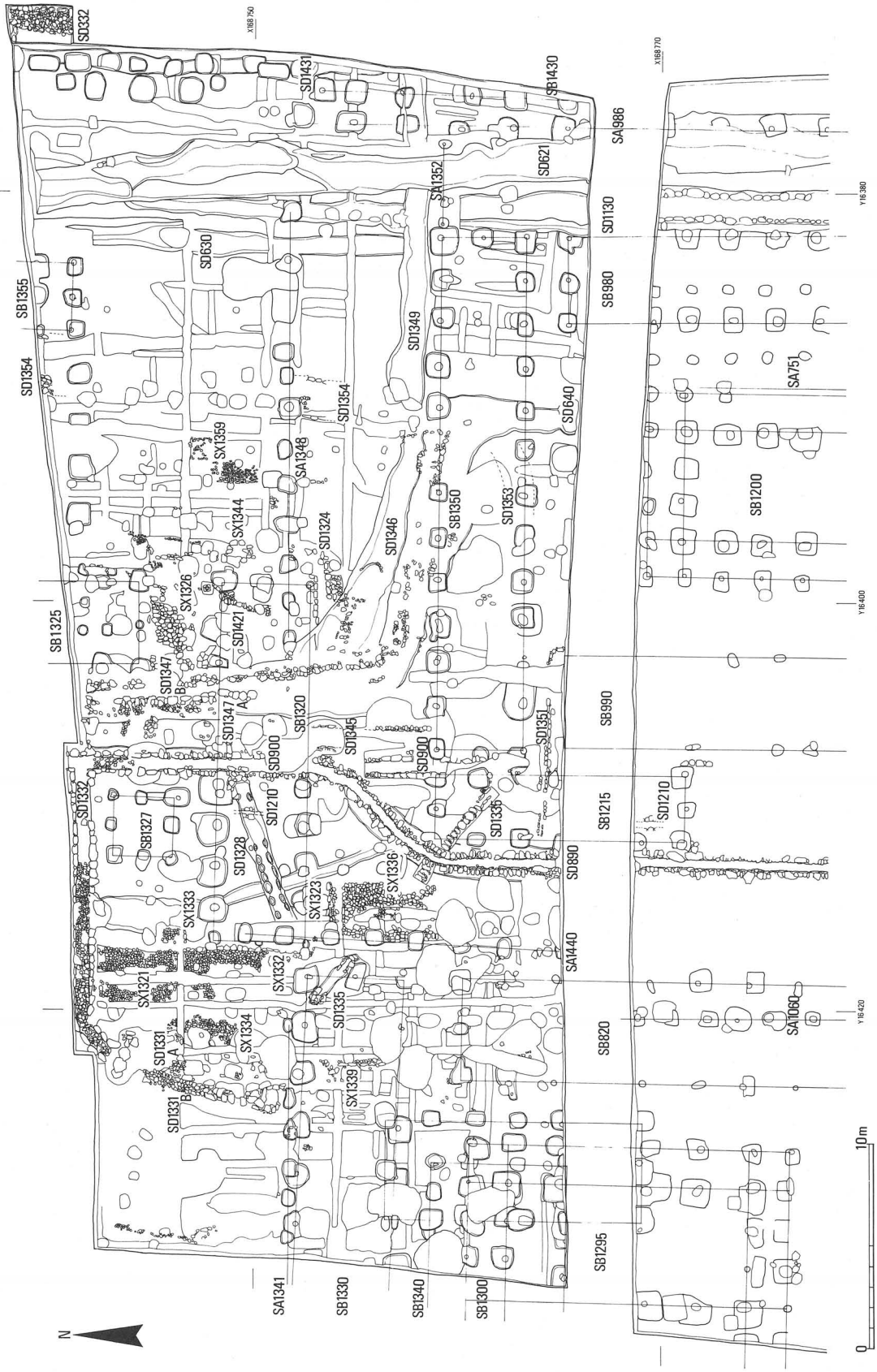
ＳＤ1421はＳＤ1345の東方でだめ押し調査中にごく一部がみつかった南北方向の石組溝。内法の上幅が２ｍ、底で1.4ｍを超える大規模なもので、開渠と考えられる。西岸にのみ石積み護岸がのこっていた。北でやや東に振れる。

ＳＤ1353は南端で２箇所にわたって検出した東西方向の溝。北肩のみの検出のため幅は不明、深さ0.7ｍ内外で、検出した範囲内では側石等の施設はない。東北方に南北溝ＳＤ1354があるが、両者の埋土は類似しており、あるいはＳＤ1353が北に折れてＳＤ1354へと連なっていたのかもしれない。ただし、ＳＤ1354には石積みの護岸がある。掘形の幅2.5ｍ・深さ0.8ｍで、人頭大の石積みの基底部だけが残る。底での内法幅1.6ｍ。

〔Ａ－２期〕石組溝ＳＤ900、掘立柱建物ＳＢ1320と周囲の石敷ＳＸ1321・1323、雨落溝ＳＤ1324および掘立柱建物ＳＢ1340などがある。

石組溝ＳＤ900は井戸ＳＥ800から発して調査区中央を縦断する南北方向の暗渠。幅約３ｍの掘形内にひとかかえ以上もある河原石を積み重ねて側石としたもので、深さ1.2ｍ、溝底での内法幅0.6ｍ、底石はない。蓋石はすべて抜き取られていた。なお、Ａ－３期に西方の石組溝ＳＤ890に付け替え、ＳＢ1350を建てたため、南半は壊されていた。

この石組溝ＳＤ900を軸線にして東西に振り分けた形で調査区北半に東西棟建物ＳＢ1320が建つ。桁行９間（柱間2.0ｍ等間）×梁行２間（柱間2.1ｍ等間）で、一辺1.1～1.5ｍほどの大型の掘形を持ち、柱はすべて抜き取られている。東西の妻柱は抜取り穴を検出しただけである。西側には石列ＳＸ1322で見切った外側に石敷ＳＸ1321・1323等が広がる。西南方に南北方向の石列ＳＸ1339が一部遺存しており、ＳＸ1322との間は幅約5.2ｍの石敷通路となっていたと理解することもできよう。東南隅では石組東西溝ＳＤ1324が北へ曲がるようなので、南辺・東辺は雨落溝で画し、外側を石敷としていたらしい。建物中



第24図　石神遺跡第８次調査遺構配置図（１：300）

央を暗渠ＳＤ900が貫通するのであるから、石列内は基壇状に高まっていたものと思われる。ＳＢ1320の東妻に柱筋を揃え北側に南北棟建物ＳＢ1325がある。今回はその南端２間分を検出した。柱間はＳＢ1320と同じく桁行が2.0ｍ、梁行が2.1ｍ等間である。

石組暗渠ＳＤ1335はＳＢ1320の西南方から東南に向い、調査区南端近くでＳＤ900に注ぎ込むと思われる全長9.2ｍの斜行溝である。一部に蓋石が遺存する。両溝の取り付き部が攪乱されているため、同時に存在したかは判断できないが、Ａ－３期の石組溝ＳＤ890や石敷ＳＸ1336より古い。深さ0.4ｍ、溝底での内法幅0.2ｍ。西北端には盲暗渠風に小石をつめてあるので石敷面の雨水を受けＳＤ900へ注いだものと考える。

ＳＸ1344はＳＢ1320の東にある人頭大より一回り大振りの塊石を径1.2ｍほどの円形に並べた遺構。外回りに面を揃えており、なんらかの台座かとも考え得る。西３分の１は石が失われているのでこの部分を掘り下げたが、導水等の施設は見つからなかった。

ＳＸ1359はＳＢ1320の東方にある南北方向の石列である。東側に礫敷を伴う。

ＳＢ1340は調査区の西南隅で検出した掘立柱建物で、南北３間、東西３間以上の東西棟と思われる。柱間は桁行1.8ｍ等間、梁行北１間1.8ｍ・南２間2.4ｍ。梁間２間で南北両庇付建物の可能性もある。柱掘形は一辺１ｍ内外とやや小振りで、Ａ－３期のＳＢ1300に切られている。

〔Ａ－３期〕この地がもっとも整備された時期である。Ａ－２期以前の遺構を一部は利用するがほとんどを廃し、大規模な整地を伴う計画的な造営を行っている。掘立建物ＳＢ980・990・1350と1300・820・1330、石組溝ＳＤ890・1351などがあるが、調査区中央の石組南北溝ＳＤ890を境に東・西の２区画に分けられる。

石組溝ＳＤ890はＡ－２期の石組溝ＳＤ900を廃して西へ付け替えたものであるが、東側の長方形区画の西南隅を迂回するようにして北へ延びている。そして区画が閉じた今回調査区の中程で再び東へ折れ曲がり、もとのＡ－２期の溝ＳＤ900へと連結している状況が判明した。溝ＳＤ900の位置ではＡ－３期

の建物群建設の妨げとなるために西へ迂回したのである。ＳＤ890の掘形は幅約1.6m、両岸に人頭大の川原石を積み上げるが、前のＳＤ900より石は小振りでしかも積み方も乱雑である。底石はない。深さ１ｍ・内法幅約0.4m、南方で一部蓋石の残った箇所があり、暗渠と考えられている。

＜東の区画＞ＳＢ980・990は同一規模の長大な南北棟建物で16.8m隔てて東西に並ぶ。第５次調査区の北端で南妻を検出、第６・７次調査区を経て北へ延びるが、今回調査区南端でＳＢ980の北妻を検出し、桁行18間であることが判明した。西側のＳＢ990も同様と考えられる。梁行２間で、柱間寸法は2.1m等間である。

ＳＢ1350は２棟の南北棟建物の外側の側柱筋に東西両妻を揃え、１柱間分隔てて北側に建つ東西棟建物である。桁行12間・梁行（柱間2.1m等間）で、第５次調査区で検出した東西棟建物ＳＢ860と同規模である。Ａ－１期の素掘東西溝ＳＤ1353を埋め立てた上に造営されている。

これら４棟の建物は、整然とした配置をとって東西幅約25m、南北長約50mの長方形区画を形成している。そして区画内には正殿と前殿の関係にあると思われる、桁行８間・梁間３間のまわりに四面庇をもつ南北棟建物ＳＢ1200と桁行６間・梁行２間の東西棟建物ＳＢ1000が納まるのである。

石組溝ＳＤ1351はＳＢ990とＳＢ1350との間を通りＳＤ890に注ぎ込む東西溝である。ＳＢ990の東北隅に沿って南に折れるようなので雨落溝をかねた区画内部からの排水溝であろう。

南北溝ＳＤ1130はＳＢ980と1350の東沿いをそれらの柱掘形を切って走り、従来は雨落溝と考えてきたもの。そのまま北にのびてゆく。今回の調査区内では護岸施設はない。

ＳＤ1349はＳＢ1350の北沿いを通る東西溝。素掘りで、東は調査区外へとのびる。南北溝ＳＤ1130を切るが、これは掘削工程の差に過ぎず、北雨落溝とみてよかろう。西半はＣ期の溝で壊されており不明。

ＳＡ1352はＳＢ1350の北側柱筋に揃った東西塀。長さ４間で柱間は不揃い、掘形も小さい。目隠し塀であろう。

＜西の区画＞石組溝ＳＤ890の西約５ｍに南北棟建物ＳＢ820がある。これは高さ0.3ｍほどの基壇を有する梁行１間（５ｍ）の単廊とみていた建物である。前回調査まででで石神遺跡の南辺を画する大垣ＳＡ600から41間分（101.5ｍ）を確認し、東側の長方形区画を囲う外郭施設ではないかと想定してきた。ところが今回北妻を検出、45間目で終わりしかも梁行２間であり、北に１間分隔てて東西棟建物ＳＢ1330が建つことが判ったのである。したがって、従来廊てみてＳＣ820としてきた遺構番号はＳＢ820に変更する。今回新たに判明した遺構の配置状況から、建物ＳＢ820は南面大垣まで達することなくある地点で終わり、北面と同じく別の東西棟建物によって区画の南面を形成していた可能性もある。

東西棟のＳＢ1330はＳＢ820の東側柱筋に東妻を揃え、柱間寸法も同規模な建物で、桁行６間以上・梁行２間である。ＳＢ820と組み合って、西の区画の北を画すと考えられる。ただし、桁行方向は西でやや北に振れている。

ＳＢ820の西雨落溝ＳＤ1080は青灰色の砂質土で埋められているが、ＳＢ1330の外側（北）では石組溝ＳＤ1331として遺存している。大型の石を敷いて底を作り、両側に巨石を立てて岸とした石組溝で、北方で東へ彎曲し東西溝ＳＤ1332へ連なる。東隣りに一部ではあるが別な底石が残っており、作り替えがあった。前者をＳＤ1331Ｂ、後者をＳＤ1331Ａとして区別する。ＡはＡ－２期に属する可能性が強い。

石組溝ＳＤ1332はＳＤ1331の水を受けて東へ流し、南北暗渠ＳＤ900に直交して注ぐ。内法幅0.6ｍ・深さ0.3ｍ。西端部の底石は大きいが、中央部では小型になり、東部ではすべて抜き取られている。両側石は巨石一石を立てたもので、もともと開渠であったとおもわれる。ＳＤ900への合流点付近は造作が雑であるが、Ａ－３期になってから付設したためと考える。

石敷ＳＸ1336は大型の石を丁寧に敷いたもので、ごく一部が遺存していたに過ぎないが、Ａ－２期のものとは明らかに違う。Ａ－２期の斜行暗渠ＳＤ1335の上を黄褐色粘土で覆った上に作られ、ＳＤ890へ向かって傾斜している。

ＳＢ1300は前回調査でその南半部を検出していた南北棟建物で、今回北半部

を検出し、桁行５間・梁行３間の身舎の四面すべてに庇が付くことがわかった。柱間寸法は桁行2.5m等間・梁行1.8m等間、庇の出1.8mである。柱掘形は長辺が1.3m以上ある長方形を呈し、きわめて大きい。南方に柱筋を揃えてやはり四面庇付きの東西棟建物ＳＢ1100があり（第６次調査）、ともに東を画するＳＢ820の西側柱からわずかに３ｍしか離れていないが、区画内の正殿および前殿相当の建物であろう。ＳＢ820の西雨落溝ＳＤ1080を埋めて建てられており、施工時期がやや遅れたようだ。柱抜取り穴に焼け土が認められるため、ＳＢ820とともに焼失したものと思われる。区画内は削平されてしまったようで、石敷は全く遺存していない。

Ｂ期　Ａ期の建物群は西方区画の焼失を機に取り壊されたらしく、その後新たに整地してＢ期の建物群が建てられる。この時期には南面の大垣をやや南に位置をずらして作り替え（ＳＡ105)、内部には総柱建物や庇のない南北棟建物が多くなるなど、前の時期と比べて土地利用の形態ひいては遺跡の性格ががらっと変わったように思われる。今回調査区ではＢ期の遺構はさほど多くなく、掘立柱建物３棟、掘立柱塀４条、石組溝１条等があるにすぎない。

ＳＡ986は調査区の東南部で検出した南北塀で、第６次調査区から続き、今回６間分を追加して計18間となった。柱間寸法は2.6m等間である。北端で西に向かって東西塀ＳＡ1348が接続する。このＳＡ1348は西方へ14間分までを確認したが、以西はＣ期の遺構で破壊され不明である。ＳＡ1341はその西延長線上に乗る東西塀で、一連のものである可能性も否定できない。６間分を検出さらに西へ延びる。ともに柱間は不揃い。これらが一連の塀であるなら、Ｂ期の区画の北辺となり、一旦閉じることになる。

ＳＢ1295は調査区西南隅にある南北棟建物。前回調査で南妻を検出しており、６間×２間に確定した。柱間は桁行2.1m・梁行2.4mである。ＳＢ1215はその東方13m強にある南北棟建物で、同じく前回調査でその南半を確認していたもの。６間×２間で、柱間は桁行2.0m・梁行1.5mである。

ＳＤ332は東北隅の拡張区で検出した南北方向の石組溝。第３次調査区から北へのびてきており、Ａ期に属すると考えてきた。しかし、検出面がかなり上

で、北で東へ振る特徴があるのでB期とみるのが妥当。

第5～7次調査で検出し旧B期に属すと考えていた2本の南北塀SA751・1060は今回みつからず、7～8次間の未掘部分で終わっている可能性が強い。

C期　南北方向の溝4条のほか多数の大小の土坑がある。溝は北で西へ振れ、柱穴と土坑の埋土に炭化物が混じる点はB－2期と共通する。

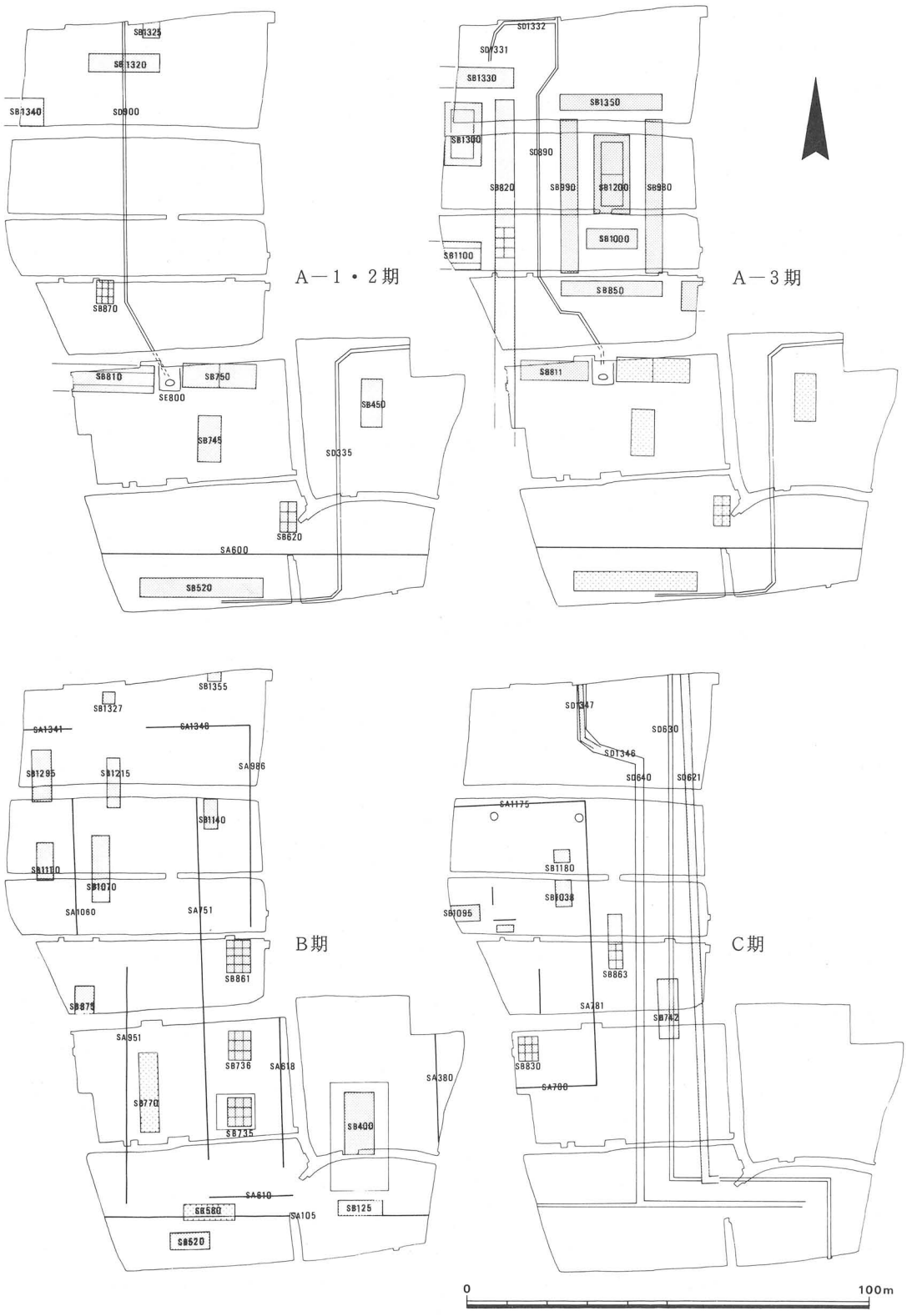
2本の南北溝SD630・640はいずれも第3次調査区内で東から延びる東西溝SD332・347から矩折れして北へ向かった素掘りの溝で、7mほどの間隔でほぼ並行するため、道路の両側溝であろうと考えてきた。今回の調査では、東側のSD630は北へと続くが徐々に浅くなり、北端では痕跡程度となる。西側のSD640は途中で斜め西へ曲がり（SD1346）、再び北へ折れて直進する（SD1347）。しかも、当初素掘りであったもの（SD1347A）の砂礫層の堆積上に塊石を積んで両岸を護岸している（SD1347B）。道路遺構と見るには幅が広すぎる（調査区北端での路面幅約22m）であろう。しかし、SD640が屈曲する位置は区画塀が西へ折れて閉じる状況に対応しており、この地点で道路が広がったと考えられなくもない。

SD621は両者の東方にある素掘溝で、幅を増しつつ北へと延びる（最大幅約3m・深さ0.5m）。

C期以降の遺構　東西、南北に縦横に走る細溝群がある。10世紀前半から14世紀にかけての土師器や瓦器を少量ながら含み、平安時代から鎌倉時代にかけて、この地域が耕地として利用されていたことを示している。

遺物

多量の遺物が出土したが、主体は土器でほかに金属製品、瓦、石製品などがある。土器は各時期の土坑や整地土から出土した土師器・須恵器（飛鳥Ⅰ～Ⅴ段階）が大半を占め、東北地方の黒色土師器が今回も数点出土した。ほかに縄紋土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の黒色土器・土師器、中世の土師器・瓦器があるが、量は少ない。瓦の出土量はきわめて少なく、軒丸瓦は1点に過ぎない。金属製品には鏃・釘・鋌などの鉄製品があるが、第7次と同じく少ない。石製品には縄紋時代から弥生時代にかけての石鏃がある。



第25図　石神遺跡主要遺構変遷図

まとめ

第8次調査の成果によって、石神遺跡の遺構群についてある程度のまとまりをつかむことができるようになった。以下においては各時期ごとに配置計画について判明した事実関係をまとめておく。

A－1・2期　ほぼ中央に石敷をめぐらした井戸を中心に数棟の東西棟建物を配置する。北方にもやはり東西棟建物を主体としたブロックが形成されるが、前面と両者の間は空閑地で、大部分は広場として利用していたことになる。各建物やブロック間に規則性は見い出し難い。

A－3期　南半部の井戸を中心とした建物群と広場はほとんどそのまま継承し、北半部に東西に並ぶ二つの区画が設けられる。

東区画の大きさは外周で東西24.7m・南北49.4m、すなわち南北長が東西幅の2倍である。24.7mは高麗尺70尺（1尺＝0.353mとして）に相当する。したがって、東区画は東西70尺×南北140尺の大きさとなる。南面大垣SA600から東区画の南辺までの距離は61.7mを測る。これは高麗尺に換算すると175尺、すなわち70尺の2.5倍となる。同じく区画内の2棟の建物のうち前殿SB1000の南側柱筋までは210尺である。このようにみてくると、東区画には70尺の半分35尺を基本単位とする配置計画があったように思われる。

では西区画はどうだろう。まず南面大垣から北面のSB1330の北側柱筋までの距離は118.0mを測り、高麗尺の333尺すなわち9.5単位分となる。ところが、東・西両区画の間隔は11.1mで、高麗尺31.5尺と端数が生じる。35尺方眼に直すと0.9駒分である。しかしながら、長廊状建物SB820等の柱間が高麗尺に則っている点や、石組溝SD890が両区画のまさに中央を北流している点からみて、東西両区画が統一した計画に基づいて配置されたことは確かなことと思われる。なお、西区画内部の2棟の建物SB1100とSB1300とは上の配置計画に合致しない。施工時期が若干遅れたことと関連するのであろう。

B期（従来のB・C期をまとめた時期）　南面大垣をやや南にずらして建て替え、数本の南北塀によって細長い空間を形成し、その中に建物群を配置する。建物はいずれもA・B期に比して小規模で、庇なしの南北棟および総柱建物が

第26図　石神遺跡全体図　　（１：500）

多い。東の区画南部には周囲に石敷きをめぐらせた大規模な南北棟建物が建つ。中央区画には3棟の総柱建物ＳＢ735・736・861が東側柱筋を揃えて建ち、その北には南北塀ＳＡ986が延びる。西側の区画には南北棟が多いが、規格性は読み取れない。なお、東西塀ＳＡ1348・1341が今回調査区中央を横断しており、ここで石神遺跡内の一つの区画が完結しているとみることができよう。

Ｃ期（従来のＤ期）　西寄りに掘立柱塀で囲んだ矩形の区画があり、東側に3条の南北溝が並ぶ。方位の振れに2種があり、また溝にも素掘りから石組への改修の形跡があるので、2小期に細分できる。

Ｃ－1期にはＳＤ630・640を両側溝とする道路遺構がある。溝心心距離で7.5ｍ幅。第3次調査区で南端を検出しており、その総長は130ｍをこえる。

Ｃ－2期には東側溝を東に移し（ＳＤ621）、西側溝を石組に改修している。そして西方に掘立柱塀で囲んだ区画を設けた。区画の大きさは南北70.6ｍであるが、これは高麗尺の200尺に相当し、大枠の配置計画が高麗尺でなされていると考え得る。内部には小規模な建物5棟、短い塀4条と井戸2基があるが、東北部の建物2棟ＳＢ1180・1038が柱筋を揃えている以外に配置の規則性は認められない。なお、ＳＤ640は区画に沿って北流し区画の東北隅で一旦西へ折れるが、この状況は区画塀のあり方と対応しており、計画的な仕事と思われる。

以上のように、石神遺跡では南面の東西大垣から北へ約130ｍまで調査が進み、遺跡は北へ続き、さらに西方へも展開することがわかってきた。一方、建物群や塀で囲んだ重要な施設はＡ～Ｃ期を通じて、多少位置は異なるが、今回調査区半ばまでで一旦終わっていることも明らかとなった。また、わずか半世紀の間に幾度もの造り替えや改修が繰り返されたのであるが、大がかりな改作の前後では遺構の状況が一変しており、この地域の性格ががらっと変わったことを物語っている。これまで明らかになった遺構のあり方は、宮殿や官衙あるいは居宅などとは異なる特殊なものであり、その性格については今後の調査の進展に期さねばならないところである。特に、Ａ－3期の西区画は東のものより大規模と思われ、その究明が大きな課題として浮上してきたと言えよう。

2. その他の調査概要

a 石神周辺Aの調査

(1988年3月)

この調査は明日香村立飛鳥幼稚園施設改善工事に伴う事前調査として明日香村飛鳥で行ったものである。調査地は石神遺跡の西方にあたり、飛鳥川が形成した谷地形の東岸に位置している。

調査区の層序は、基本的に盛土、耕土、床土、暗褐色土、含炭褐色土、淡褐色砂質土の順であり、遺構は淡褐色砂質土上面で検出したが、全体に土層は一定しない。調査の結果、7世紀代とみられる柱穴2を検出した。

この柱穴は調査区の南寄りに南北に並んでおり、柱の間隔は2.05mあった。石神遺跡の各期の遺構と同様に、藤原宮期の遺物を含む含炭褐色土層下で確認できたので、石神遺跡と一連の遺構と考えてよいだろう。

なお、柱穴のすぐ西側は、飛鳥川へ向かって急激に下がっており、これ以西に古代の遺構面は続かない。

b 飛鳥寺の調査(1987—1次)

(1988年2月)

この調査は史跡飛鳥寺跡における農小屋改築に伴う事前調査として行ったものである。当該地は飛鳥寺境内東辺、講堂の東約90mを隔てる。東西12m・南北3mの調査区を設定した。調査区の基本層序は上から耕土、床土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土となる。

地表下約0.8mの褐色土上面で東西石組溝1条、瓦敷および瓦組1基などを検出した。

石組溝SD710は内法幅0.2m・深さ0.2mで人頭大の河原石一段を並べて側石とする。底石はなく流砂の堆積が認められた。側石の据え付け掘形はなく褐色土の整地と同時に据えたものである。溝心から1.8m南には径0.5mほどの河原石があり、やはり褐色土に据えている。礫石の可能性も考えられるが関

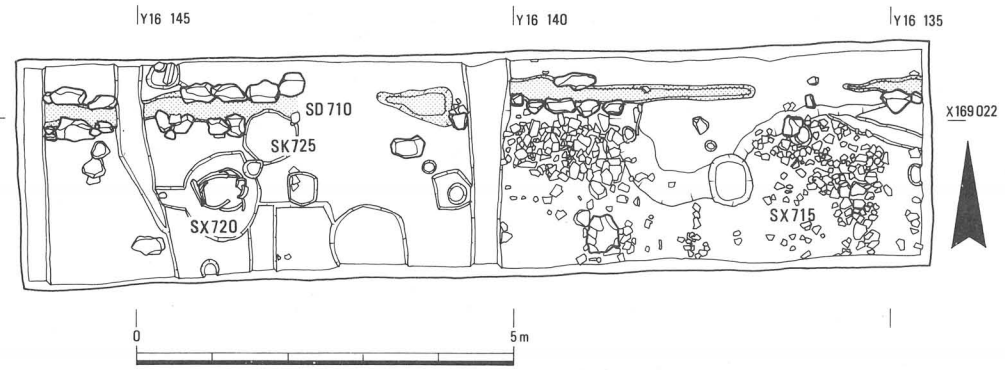
連する遺構が残っていないので、その性格は不明である。

調査区東半では石組溝の南側に瓦敷ＳＸ715が残る。平瓦片の凸面を上面に揃えて、褐色土上面に据えたもので溝の側石および礎石かと考えられた河原石に密着しており一連の時期の遺構とみられる。調査区の西よりでは径１ｍほどの円形掘形に据えた瓦組遺構がある。東西0.8ｍ・南北0.4ｍ・深さ0.4ｍの穴の側壁に平瓦を主体として垂直に立て並べている。底には河原石が詰まっており、これは裏込めの石が落ち込んだものと考えられる。遺構の性格は不明だが、瓦組の上端は溝の側石とほぼ面が揃っているので、同時期とみられる。

そのほか新しい時期の遺構には素掘溝５条、瓦溜りＳＫ725、土坑・小穴多数があり、埋土は上層の黒褐色土および暗褐色土に類する。

褐色土には瓦や土器を含む。土器は７世紀を主体とするが８世紀のものも含む。暗褐色土には10世紀初頭の土器を含み、黒褐色土および素掘溝や小穴の一部からは黒色土器が出土した。したがって、石組溝、瓦敷、瓦組の存続年代は奈良時代から平安時代初頭にかけてと判断される。調査区中央の南北溝底でさらに下層に溝状遺構のあることを確認したので、遺構の少ない南側で褐色土を一部掘り下げて調査したが、下層遺構はここではみつからなかった。

出土遺物には多量の瓦、土器などがある。軒瓦には軒丸瓦15点、軒平瓦２点があり、飛鳥寺創建時のものから藤原宮期にかけてのものまである。瓦組からは「女瓦」、瓦溜りからは「□僧□□□」の箆書のある平瓦が出土した。土器には、土師器や須恵器のほかに緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器を含む。そのほ



第27図　飛鳥寺1987－１次調査遺構配置図（１：100）

かに硯、砥石、凝灰岩切石が出土した。

飛鳥寺寺域東辺部に関しては、従来から現状変更に伴う調査を各所で行っているが、小規模調査でもあり寺に関連する明確な遺構を見いだしていない。今回検出した石組溝、瓦敷、瓦組は創建時に遡るものではないが寺域東辺の様相を知る手がかりを得た。なお、調査区の西方約30m余りの所では土木工事の際たまたま石組溝が発見されており（飛鳥寺発掘調査報告）、今回検出した石組溝のほぼ西延長線上にあたることは考慮されよう。

c　飛鳥寺の調査（1987—2次）

（1988年2月）

この調査は飛鳥寺東北方、飛鳥座神社前の東西道路の南側において、農小屋新築に伴う事前調査として行ったものである。当該地は1982年度調査で確認した寺域東北隅からやや東に振れて南に延びる東面大垣（概報13）の延長線の内側に隣接する。調査地の基本層序は上から表土0.6m、灰褐色土0.5m、黄褐色土0.1m、暗褐色土0.6mとなる。黄褐色土上面で中世の東西小溝3条および南北小溝1条を検出した。暗褐色土からは7世紀代の土器および瓦が出土したが、この時期の遺構は検出されなかった。

d　奥山久米寺の調査（1988—1次）

（1988年8月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村奥山で行ったものである。調査地は、奥山久米寺の推定寺域の北半に位置し、東西2.5m・南北1.8mの調査区を設けた。調査区の西端で柱穴1を検出したが、敷地の関係でそれ以上の追求はできなかった。

e　川原寺の調査（1988－１次）

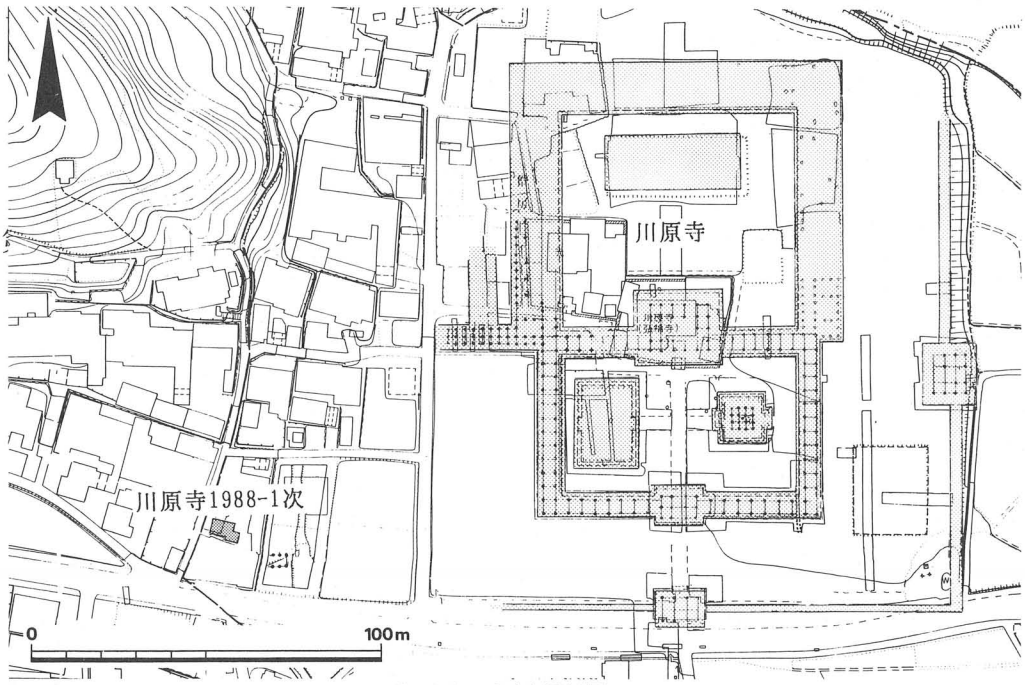
（1988年10月）

この調査は、住宅改築に伴う事前調査として明日香村川原で行ったものである。調査地は寺域南西部の丘陵裾に位置し、1979年度調査区の西にあたる。調査は東西６ｍ・南北５ｍの発掘区を設けて実施し、南東部の一部を拡張した。調査面積は約40㎡である。

調査地の層序は、上から耕土、床土、黄褐色粘質土、花崗岩風化土の順で、遺構の大部分は花崗岩風化土上面で検出した。

検出した遺構には、窯状遺構１基、土坑４基、東西溝１条がある。

窯状遺構は天井部が削平されているが、底部の断面が浅いＵ字形を呈し、長さ約2.5ｍ・幅約0.25ｍ・深さ約0.12ｍである。南端が焚口で、中央部分が最も火を受けて赤変しており、北端には赤変部が認められない。窯体内には多量の木炭と、暗青灰褐色に固く焼けた窯壁が堆積しており、また13世紀頃の瓦器、土師器小皿、羽釜の小片と、焼けた獣骨片が少量出土した。この他に検出した土坑や溝も同時期の遺物や焼土を含み、窯状遺構と一連の施設と思われる。



第28図　川原寺周辺図

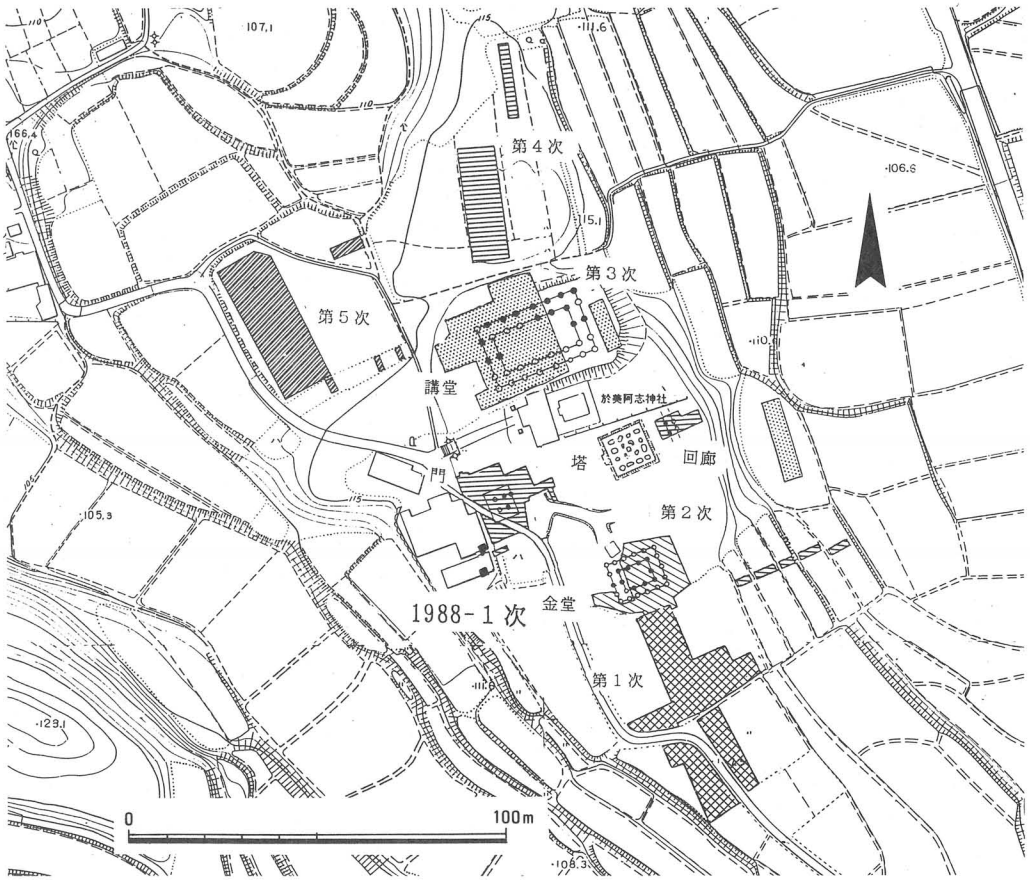
f　桧隈寺の調査（1988－１次）

（1988年５月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は1982年に明らかになった西門基壇（塔跡の西方にある小基壇）（概報13）に道路を隔てて接する宅地で、西門に至る参道などの存在が想定された。東西２ｍ・南北３ｍの北区と一辺２ｍ四方の南区の２つの調査区を設定し、調査した。

北区では宅地造成に伴う盛土の直下が山土の地山となる。南区でも盛土直下に旧地形の傾斜面に沿いながら南に落ち込む同様の地山を確認したのみである。各調査区とも遺構は検出されなかった。

境内地であるにもかかわらず、桧隈寺に関わる遺構は全く検出されておらず、この地区は後世に大規模な削平を受けた可能性が高い。



第29図　桧隈寺周辺図

図　　版

写真１　藤原宮第59次（西方官衙地区）調査区北半全景（南から）

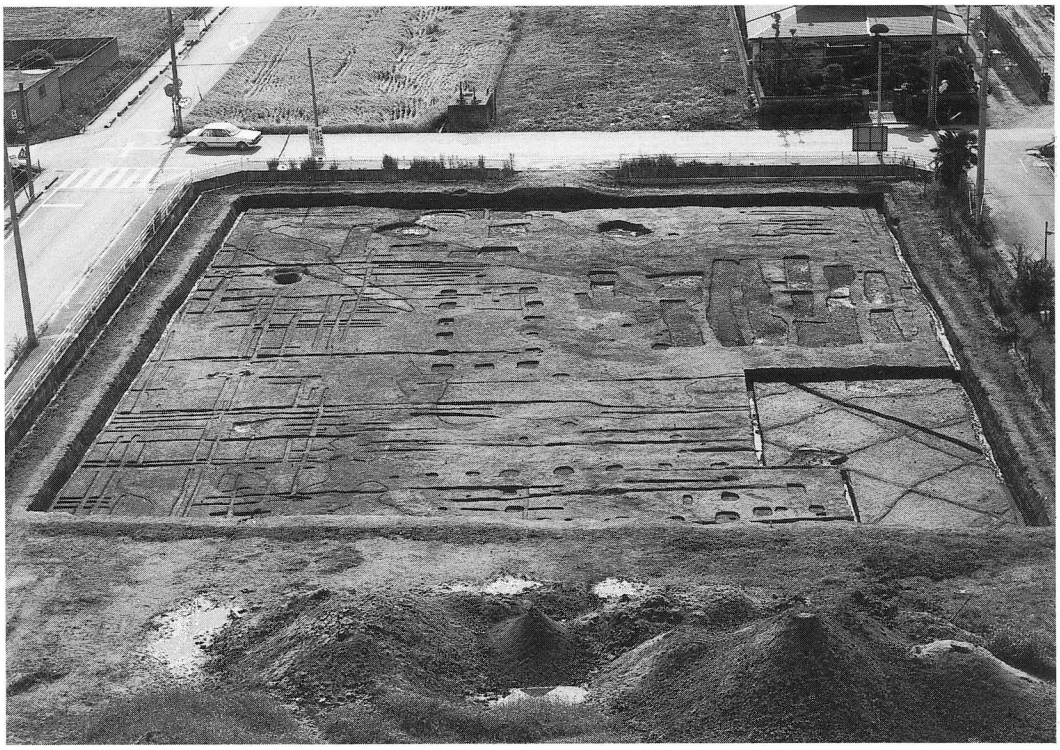


写真２　藤原宮第59次（西方官衙地区）調査区南半全景（北から）

写真３　藤原宮第58―１次（西面南門地区）調査区北区全景（西から）

写真４　藤原宮第54―19次（右京七・八条一坊）調査区Ⅳ区南半全景（西から）

写真５　藤原宮第58―５次（下ツ道）
調査区全景（南から）

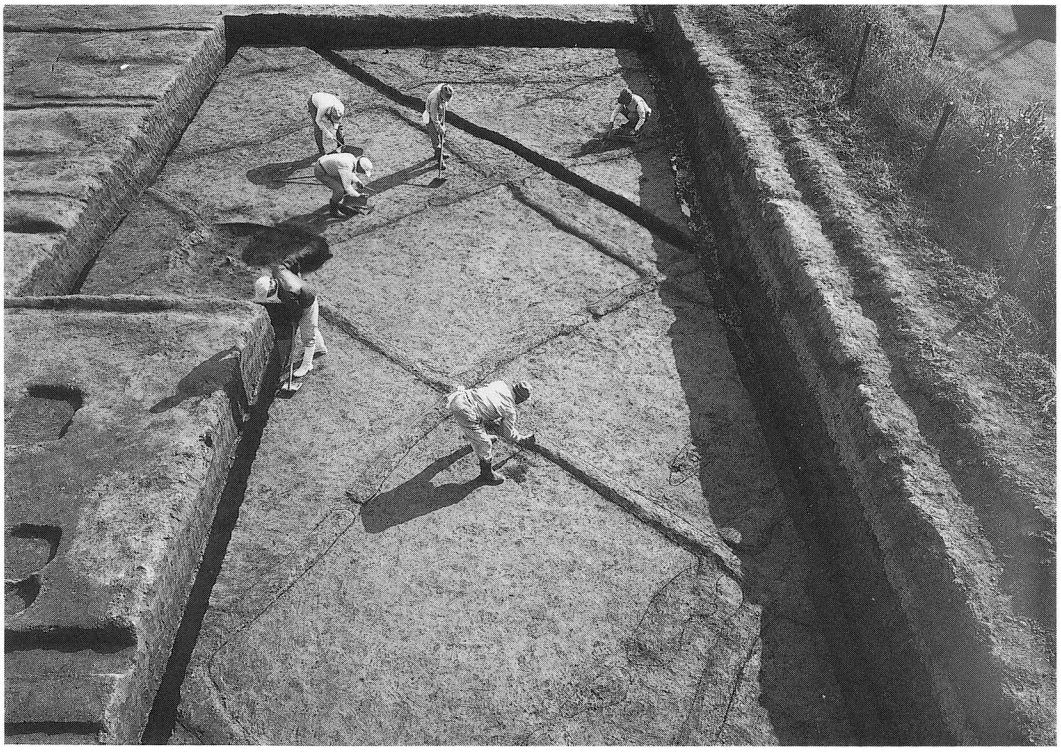


写真６　藤原宮第59次（西方官衙地区）調査区下層第１水田（北から）

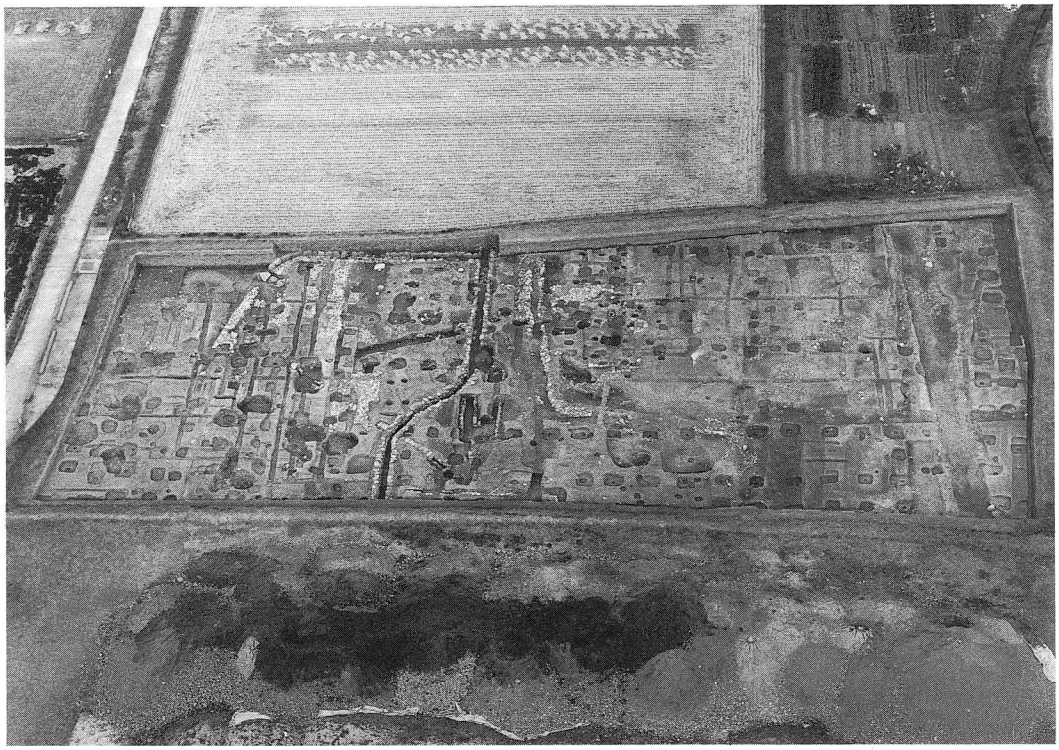
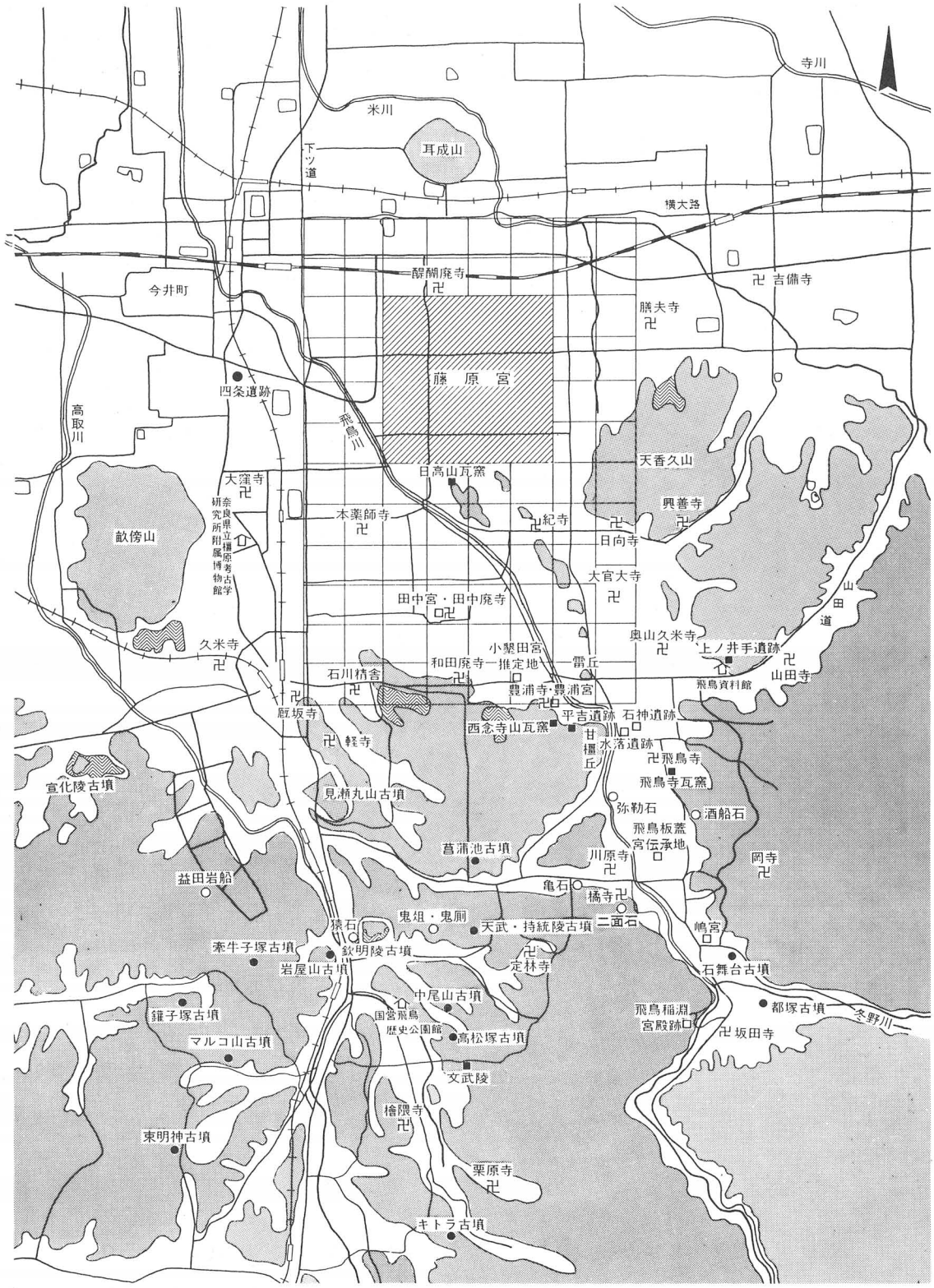


写真７　石神遺跡第８次調査区全景（南から）

写真８　石神遺跡第８次調査区錯綜する石組溝（南から）



飛鳥・藤原地域の遺跡（1：40000）

飛鳥・藤原宮発掘調査概報　19

1989年 5 月24日発行　編集発行：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

〒634　橿原市木之本町宮ノ脇
Tel　07442 —(4)— 1122
FAX　07442 —(4)— 1742